

広島市の文化財 第30集

広島市安佐南区祇園町所在

広島経済大学
構内遺跡群 発掘調査報告

1984.3

広島市教育委員会

4. 芳 谷 遺 跡

- (1) 調 査 の 概 要29
- (2) 検 出 の 遺 構29
- (3) 検 出 の 遺 物33
- (4) 小 結35

(1) 調査の概要

本遺跡は、本遺跡群中の中央の尾根上にあり、長う子遺跡とは、谷をはさんで南側に隣接している。遺跡は、武田山から下ってきた尾根が標高約140mあたりから、傾斜がゆるやかになると同時に、幅が広く平坦となる部分に位置している。この平坦部は3段の階段状を呈している。分布調査時に、住居跡断面と、土器片が採集され、この平坦部に集落の存在が推定されていた。この分布調査の結果と、地形状態から、遺構は長さ約60m、幅約15mの範囲に存在すると推定し、尾根の形状にあわせて調査区を設定した。調査区は尾根中心線で南北2区に分割し、さらに各区を6区に分割して設定し、各調査区間にはベルトを残して行ない、最終的にはベルトを撤去して完掘した。

調査の結果、推定した範囲内全域から、竪穴式住居跡、土壙、古墳、掘立柱建物跡を検出した。遺物は、住居跡、土壙内及びその周辺から、弥生土器、砥石が、古墳からは、銅鏡、管玉、ガラス小玉、刀子等が出土した。

(2) 検出の遺構 (第53図)

遺跡のほぼ全域から遺構が検出された。検出された遺構は、竪穴式住居跡5軒・土壙5基、古墳1基・掘立柱建物跡1棟である。竪穴式住居は、尾根先端部から順に遺構番号を付し、重複した住居は古い方を先に番号を付した。土壙は、先端部から順に1号～5号とした。古墳については、本古墳の他に大谷遺跡から2基を検出しており、これら3基は近接しているところから芳ヶ谷古墳群として扱いかい、本古墳を第1号古墳とした。

以下、各遺構について述べていきたい。

第1号住居跡 (第54図)

本遺跡の先端部の尾根平坦部が斜面となって谷に向かって下りはじめのあたりの斜面側で検出した竪穴式住居跡である。地山を最高で約60cm掘り込んで作っており、掘り方南半部は消滅しており、柱穴の状態から南半部は盛り土としたと考えられる。検出した壁は、東壁から北壁にかけてL字状に検出された。西壁は、木材の運搬による溝のために消滅している。検出状態から、北壁の西側でわずかに曲がりをはじめることから北壁は完全に残っていると思われ、東壁から北壁にかけてL字状を呈することから、本住居は、1辺4mの規模をもつ方形プランの庄居と考えられる。壁に接して全体に壁溝が検出され、幅20cm～50cmを測る。深き4cm～11cmを測る。床面からは、小ピットが6カ所から検出された(P1～P6)。この内、位置、規模から、本住居の柱穴は、P1～P2と考えられる。この2本の柱の位置から、本来4本柱であったと推定される。柱穴は、庄居コーナーから約1.5m～1.6m離れて配置されており、P1は径35cm×45cm、深さ69cm、P2は径25cm×30cm、深さ58cmを測り、底面のレベルは一致している。P1、P2の中間の床面から黒色土が径40cmの範囲で検出され、床面は赤変していないが、この部分で火の使用があったと考えられる。遺物は、少量の弥生土器片、砥石1点、安山岩剥片1点が出土した。

第2号住居跡 (第55図)

1号住居の北約13mの尾根平坦部からやや南側斜面に寄った位置に検出した竪穴式住居跡である。わずかに斜面にかかる位置にあるため、西壁から南壁の一部が消滅している。平面形は南北に細長い方形を呈する。地山を南北4.3m、東西3.5m、深さ最大で26cm掘り込んで床面としている。北壁と、東壁から南壁にかけて壁溝が検出され、幅25cm～30cm、深さ2cm～5cmを測る。床面からは小ピットが8カ所から検出されたが、規模・位置から、この内4本が主柱穴と考えられる。各柱穴は、壁より70cm～1m離れて配置され、径

40cm～60cm、深さ38cm～72cmを測る。底面のレベルは、不揃いである。柱間は、1.65m～1.9mを測り、北辺の柱間がやや狭い。床面中央からは90cm×90cm、深さ10cm～11cmの円形に近い浅い土壌が検出された。埋土内からは、黒色土とともに炭化物が検出され、炉跡と考えられる。壁の赤変は見られなかった。遺物は、少量の土器が出土したが、東壁中央部あたりで、完形に近い土器1点が出土した。

第3号住居跡（第56図）

2号住居の北側約2Mの尾根上平坦面から検出された小型の竪穴式住居跡である。尾根中心線よりやや斜面側に寄っている。平面プランは東西に細長い方形を呈する。地山を南北2.8m、東西3.6m、深さは最大で60cmに掘り込んで床面としている。壁は、やや斜面にかかる位置のため、西側に至る程低くなっている。壁溝は、明瞭ではないが東壁を除く3辺の1部から検出され、幅10cm～20cm、深さ1cm～5cmを測る。床面からは小ピットが2ヶ所で検出され、位置、形状から主柱穴と考えられる。柱穴は壁から約50cm離れて配置され、径30cm、35cm、深さ35cm、54cmを測るが、底面のレベルは一致していない。

本住居内からは、完形品を含む多量の弥生土器が出土した。特に、東半部からは完形品及びそれに近い土器が集中して出土した。器種は壺、甕、高坏、甌、鉢と一括して出土した。中央部よりやや北側で粘土塊が出土した。少量ではあるが、良質の粘土であり、土器製作用とも考えられる。本住居の西側に近接して、円形に近いプランを呈する浅い土壌を検出した。（第4号土壌）。埋土内からは、土器片、貝殻が出土し本住居に伴う土壌と考えられる。不用物の廃棄用土壌と考えられよう。

第4・5号住居跡（第57図）

3号住居の西側上方約8mの、ゆるやかな尾根上平坦面から検出した竪穴式住居跡である。掘り方の検出状況から、2軒の重複が認められる。両住居の新旧関係は、土層観察と、遺物の出土レベルを手がかりとして考えられる。まず、土層であるが、尾根下側の住居床面を埋めるように上側の住居床面と同レベルで延びる土層が観察され、下側の住居の壁掘り方の立ち上がりは見られなかった。このことから、尾根下側の住居が古いことが確認できよう。遺物の出土レベルは、下側の住居内の遺物の出土レベルが、上側の住居床面と同レベルか、やや高い位置を示すのが多いことが観察された。従って、この点からも、下側の住居の方が古いことが首肯できよう。そこで、古い方の住居を4号住居跡、新しい方の住居跡を5号住居跡とした。

4号住居は、地山が傾斜しているため、南半部側に至って壁が消滅している。検出された掘り方の形状から、本住居は円形プランを呈する径約5mの住居と推定される。残存する壁高は最高で15cmを測る。掘り方の消滅する南半部は、床面の凹凸が著しく、この部分は盛り土としたことが考えられる。壁溝は、残存する掘り方のほぼ半ばまで検出され、幅20cm～35cm、深さ1cm～9cmを測る。床面からは、5号住居内で検出されたものも含めて、小ピットが23カ所から検出された。（P1～P23、規模は計測表参照）。この内、本住居内からは、P5～P23が検出された。このピット群には、5号住居に伴うものが含まれていることは確実であるが、明確に区別することはできない。又、4号住居に伴うと考えられる柱穴の組み合わせも確認することは困難であるが、位置、規模等から検討した結果、①P4、P8、P9、②P8、P15、P20の2通りの組み合わせが想定できた。各組み合わせとも、南側の1本が欠失しているが、これは床面が傾斜した盛り土となる部分にあたるためと考えられる。しかし、2通りの組み合わせのいずれが、本住居の主柱穴となるかについては、明らかにすることはできない。いずれにしても、本住居は4本柱としたことが考えられよう。

遺物は土器片が、少量出土したが、大部分は細片であった。しかも、出土したレベルから考えて、本住居に伴うと断定できるものは少ない。しかし、床面北端部、壁直近から、小形鉢形土器が出土した。この土器は4号住居床面直上から出土しており、この土器は4号住居に伴うことが確認できる。

5号住居は、4号住居と掘り方のほぼ半ばを重複して、4号住居の北西側に検出された竪穴式住居跡で、

No.	径	深さ	備考	No.	径	深さ	備考
1	40×50	48～58	重複、紡錘車状石製品	13	30	14～32	重複(?)
2	35	51		14	30×35	29～39	
3	30×65	46～61	重複(?)	15	35×45	35	方形
4	25×30	32		16	35×40	35	
5	25	31		17	15×20	11	
6	25	29		18	20×25	14	
7	20	29		19	25	45	
8	45×55	31～45	重複(?)	20	30×55	16～40	重複(?)
9	25	39		21	30	16	
10	20	18		22	35	58	
11	30×35	25		23	20×25	37	
12	20×35	30					

付表3 4・5号住居小ピット計測表

と考えられるが、区別は困難である。そこで、P1～P4の位置、規模から検討した結果、①P1, P2, P4, P9, P23, ②P1, P3, P8, P22の2通りの組み合わせが想定された。しかし、①・②いずれが、5号住居に伴うかは明らかにすることはできない。なお、P1, P4は形状から、2本の柱穴の重複していることが考えられ、5号住居は建て替えがあった可能性がある。

遺物は、床面から少量の土器片が出土した。この内、P2の西側、壁の直近より大形壺形土器の口縁部のみが完形で出土した。また、P1の掘り方内で床面とほぼ同レベルから、円形の紡錘車状の石製品が1点出土した。他にP1, P3の中間から偏平な河原石が出土した。作業台かとも考えられる。

5号住居の北西の掘り方外で、方形を呈する土壇2基が検出された。北側の土壇は、小口が消滅しているため長さは明確ではないが、推定長1.2m、幅約50cm、深さは最高で30cmを測る。南側の土壇は、長さ1m、幅約40cm、深さ8cm～20cmを測る。両土壇とも、壇内からは遺物が出土せず、時期、性格については明らかにできない。又、5号住居の西側約9mの尾根急斜面から、断面袋状を呈する円形の土壇(第5号土壇)を検出した。この土壇は、形状から貯蔵穴と考えられるが、4号住居5号住居のいずれに伴うかは明らかではない。この土壇の周辺の斜面からは、土器がまとまって出土したが、多くは破片の状態であり、上部からの転落と考えられる。

第1・2号土壇(第58図)

第2号住居跡の南西側約1mの、芳ヶ谷1号古墳周溝の両端に重複して検出された。西側から1号土壇・2号土壇とした。両土壇の新旧関係については明らかにできなかった。

第1号土壇は、平面形は、円形を呈し、開口部径1.2m～1.3m、底部径1.4m、深さは65cm～83cmを測る。断面は、袋状を呈し、最大径は、底面よりやや上部に位置し、径1.4mを測る。底面は、ほぼ水平としている。遺物は、弥生土器の破片が底面より30cm～60cm浮いた位置から出土した。形状から、貯蔵穴と考えられ、第2号住居跡に伴う貯蔵穴と考えられる。

第2号土壇は、平面形が、不整円形を呈する土壇、開口部に向かって「ハ字状」に開く形状を呈している。開口部は、長径2.1m、短径1.7m(推定)、底面は長径1.2m、短径1.1m(推定)、深さは最大で87cmを測る。壇内の東端部壁に近い部分で、地山より約60cm浮いた位置で、少なくとも土器1個体分が破片の

検出された掘り方の形状から、円形プランを呈する径約5mの住居と推定される。地山の高い方を約50cm掘り下げて床面としている。壁溝は一部で途切れるが、検出した掘り方のほぼ3/4程度に設けられ、幅約30cm、深さ3cm～10cmを測る。床面からは、P1～P4の小ピットが検出された。既述のように4号住居内のP5～P23の内にも本住居に伴うピットが含まれ

状態で出土した。他は、埋土内上面から、土器片が少量出土した。本土壙は、形状が他の土壙と異なっており、性格については明確ではない。

第3号土壙（第59図）

第3号住居の東側約4mの尾根平坦面が斜面にかかるあたりから検出した土壙である。平面形は、ほぼ円形を呈し、開口部径で1.4m×1.55m、深さは尾根側で1.14m、斜面側で52cmを測る。断面は袋状を呈し、最大径は底面に位置し、1.6m×1.7mを測る。埋土内からは、少量の弥生土器細片が出土した。形状から貯蔵穴と考えられる。位置から、第2号住居、第3号住居のいずれに伴うかは、明らかではない。

第4号土壙（第56図）

第3号住居の西側直近から検出した土壙である。平面形は、わずかに方形を呈し、開口部は不整形であるが、1.1m×1.35mを測る。西側に向けて浅くなり46cm～64cmを測る。断面は、わずかに袋状を呈しており、最大径は、ほぼ円形を呈する底部に位置し、径1.05mを測る。埋土内からは、開口部肩部とほぼ同レベルで土器片が、土器の下側から貝層が検出された。貝層の検出範囲は、50cm×80cm、厚さ10cmを測る。底面からは約30cm浮いている。形状と位置から、本土壙は3号住居跡に伴うものと考えられ、不用物の廃棄用の土壙と思われる。

第5号土壙（第60図）

5号住居の西方約9mの斜面から検出した土壙である。地山が急傾斜となっているため、開口部のレベルは、北側と南側で約80cmの差が生じている。平面形は、ほぼ円形を呈し、開口部径1.2m、深さは、北側で103cm、南側で28cmを測る。断面はわずかに袋状を呈し、最大径は開口部と同大である。底部は、径1.05mを測り、縁辺部に深さ1cm～4cmの溝を全体にめぐらせている。壙内の上面からは、弥生土器の破片が多く出土した。この土壙周辺の斜面からは、多くの弥生土器片が出土したが、地山から浮いた状態であり、全て、上部からの転落と考えられる。

本土壙は、形状から貯蔵穴と考えられる。位置から、4号住居、5号住居のいずれかに伴うと考えられるが、明らかではない。

芳ヶ谷第1号古墳（第61図）

尾根先端部から検出された古墳である。第1号住居跡と第2号住居跡の間に位置している。調査前の地形観察からは、古墳の存在をうかがわせる地形の高まり、周溝などは観察されなかった。

調査の結果、尾根線と直交するように、2カ所から、地山を掘り込んだ掘り方が検出された。尾根先端部からは、尾根と直交するように落ち込みを検出し、検出した部分で長さ6.5m、高さは最高で20cmを測る落ち込みを検出した。この落ち込みに接して、角礫群が検出された。この礫群は、地山より約10cm程度浮いており、墳丘裾部に配したものと推定される。落ち込み下端から尾根先端に向けては、平坦とされていた。落ち込みの西端は、木材搬出の際の溝によって破壊され、全体の規模は明らかではないが西側にさらに連続していたと考えられる。この落ち込みより約8m奥に入った位置に、尾根線と直交するように溝を検出した。この溝は、西端部で1号土壙、2号土壙と重複しており、全体の規模は明らかではない。現存する規模は、長さ6.5m、幅約1m、深さは中央部で20cmを測る。これら両遺構は、検出状態から、古墳の前後を区画する施設と考えられる。これに対し、尾根斜面側からは、地山整形痕は検出されなかったが、西側斜面から、地山を掘り込んだ住居跡状の遺構が検出された。この掘り方は、地山を長さ約4m、壁の高さ約1mに掘り込んでいる。しかし、北側は、木根によって破壊をうけており、本来はもう少し北側に延びていたと考えられる。この掘り方の壁に接して溝が検出されており、形状から住居跡の可能性が考えられる。しかし、この掘り方の肩部から、角礫が出土し、掘り方内からも出土しており、この礫は、先に述べた礫群と同様の性格を有していることが想定

される。従って、この遺構は、墳丘の一部となる可能性も考えられる。以上のことから本古墳は、南北方向に約8mを測るが、東西は明確にはできない。又、検出した遺構の状態から方形を呈すると考えられる。主体部と考えられる遺構は、先端部落ち込みから約3m、溝からは約5mの位置から検出された土壌である。尾根中心線からはやや西側に寄っており、全体的に、やや南西側にずれた位置から検出された。土壌は、浅い表土直下から検出され、表土上面から深さ約20cmである。壙内からは副葬品が出土した。

主体部 (第62図)

主体部と考えられる土壌は、小口部分が丸みを帯びる細長い土壌である。長さ2.8m、幅は中央部で75cm、深さは、中央部で25cmを測る。主軸はN53°30'Eをとる。西側小口で、50cm×30cm、深さは、掘り方肩部から15cm、床面より4cmを測る土壌を設けている。排水用の施設と考えられる。東側小口は、60cm×45cm、床面より7cm高い平坦面を設けており、床面との境界あたりで、21cm×15cm、厚さ5cmの角礫が下面がほぼ水平の状態で見出された。この角礫と小口壁との間から遺物が出土した。土壌の断面は、浅いU字形を呈しており、この形状から割竹形木棺を埋置したものと考えられる。棺の規模は、明確にすることは困難であるが、角礫の部分に小口部があると考えられ、土壌の規模とあわせて考えると、推定で最大22mを測ると考えられる。又は、断面の形状から、棺の径は60cm前後と推定されよう。頭位は遺物の出土位置から、東側と考えられる。

遺物は、既に述べたように、東端の平坦部から出土した。遺物は、?製銅鏡1面、へき玉製勾玉2点、管玉20点～21点、ガラス小玉13点、刀子1点が出土した。出土状態(第63図)は、鏡面を上にして、水平を保って出土した。鏡面上に密着して、管玉、ガラス小玉、勾玉が出土し、鏡外縁に接して鏡よりわずかに高い位置で刀子が出土した。又、鏡より8cm離れた位置で鏡より5cm浮いた位置で勾玉、管玉が出土した。鏡背面に密着して、長さ9cm、幅9cmの方形の木質が残存していた。この木質は、板状を呈している。以上のことから、これら出土遺物は、棺内の副葬とは考えられず、箱状の容器に納めて埋置していたものと考えられる。しかし、勾玉、管玉の中に、鏡より浮いたものが見られるところから、鏡のみを箱に入れ、他は箱の上に置いた可能性も考えられよう。

掘立柱建物跡 (第64図)

本遺跡の最奥部、第5号住居上方約8mに位置している。地山の尾根線に直交するように、長さ約8mに掘り込んで、三角形を呈する平坦部を造成して遺構面としており、最大幅約6mを測る。この平坦面及び斜面から、多数の小ピットを検出した。検出した小ピットから、少なくとも1棟の掘立柱建物跡が想定された。

建物跡は、平坦部のほぼ中央に位置し2間×1間と考えられる。桁行3.0m、梁行3.2m、柱間は、桁行1.5m、梁行3.2mを測る。

平坦面及び斜面からは、少量の弥生土器が出土した。

この建物跡の尾根西側斜面から、多量の土器片が出土した。この土器片は上部からの流人と考えられ、本建物跡周辺が弥生土器以外の遺物が出土しないことから、本建物跡は弥生時代のものと考えられ、本集落に伴う建物跡と考えられる。

(3) 検出の遺物

調査の結果、調査区域全体から遺物が出土した。遺物は多量の弥生土器の他、少量の石製品、鉄製品の外備前焼等が出土した。芳ヶ谷1号古墳からは、銅鏡、勾玉、ガラス小玉、刀子が出土している。土器類は、出土量に対して比較的完形品を多く含むことが指摘できよう。

以下、各遺物について、その概要を述べていきたい。

弥生土器（第65図～第70図）

本遺跡からは、比較的多く弥生土器が出土したが、その多くは、第3号住居内及びその近辺の南側斜面に集中して出土しており、特に第3号住居内から出土したものは完形品を多く含んで出土した。器種については、弥生土器の基本的な組み合わせである。壺、甕、高坏、鉢、甗が出土した。量的には壺、甕が大部分を占めている。

壺形土器、甕形土器の特徴は、次のことがあげられる。形態は、「くの字」状に外反する口縁部の端部は器厚を保つがやや減じ、平たくおさめ、底部は、3号住居内出土のものは平底又はそれに近い形態を呈するが、第5号土壙近辺の斜面から出土したものは明瞭な平底としており、3号住居内出土のものと同様に第5号土壙周辺出土のものに若干差異が見られる。成形技法については、内面はヘラ削りの後、ナデ調整を施したものと、ヘラ削りのみのものが見られる。外面は、ハケ目調整又はクシ歯状工具による調整後ナデ調整を施している。鉢形土器は、形態的にはそれ程大きな差異は見られないが、底部に丸底、平底が見られる。高坏については、調整法は磨滅のため明らかでないが内面底部に粘土板を充てんする技法をとっている。

以下、各遺物の説明は観察表とする。

紡錘車状石製品（第71図）

第5号住居1号ピット内から出土した銅銭状を呈する石製品である。出土レベルは床面とほぼ同位である。全体の約2分の1の破片で、ほぼ円形を呈し、復元すると径4.5cm前後と推定される。断面は凸レンズ状を呈し、厚さは中央部で5.5mm、縁部で2.5mmを測る。中央に、1辺7.5mmの方形の孔が穿たれている。孔と外縁のほぼ中間に、キリ状工具で穿孔しようとした痕跡が残存している。

石器類（第72図1～4）

本遺跡からは、砥石の他用途不明の石器が4点出土した。住居跡内から出土したものは1点で、他は調査区内から出土し、遺構に伴っていない。1は、1号住居跡から出土した完形の砥石である。扁平な河原石を使用したものと思われる。1面を使用しており、中央部が凹んでいる。長さ11.3cm、幅2.2cm、厚さ0.9cmを測る。緑色片岩製である。2は、S2区内から出土した完形の砥石である。広口面の4面に使用が認められるが、2面に使用面が偏しており、他の2面は部分的に使用痕が見られる。長さ10.4cm、最大幅6.0cm、最大厚さ5.4cmを測る。流紋岩製である。3は、用途不明の石製品である。扁平な石材で、小口面の1面に擦った痕跡が見られる。全長14cm、幅6cm、厚さ1.4cmを測る。緑色片岩製である。4は、調査区内で表採した完形の砥石である。方形を呈し、広口面の上下両面に使用痕が見られ、わずかに凹んでいる。長さ10cm、幅8.4cm、最大厚さ3.6cmを測る。半花崗岩製である。

鉄製品（第73図36、第74図1～3）

本遺跡からは、極く少量の鉄製品が出土したのみであり、図示できたのは4点である。第73図36は、芳ヶ谷1号古墳主体部から出土した刀子である。先端部をわずかに欠失しており、わずかに外反りを呈している。推定全長14.0cm、刃部長11.2cm、刃部中央部幅1.7cm、背部厚さ0.5cm、茎部長2.8cm、関部幅1.4cm、関部厚さ0.5cmを測る。片面に木質の付着が見られるが、木目の方向から、鏡を納めた容器の木質と考えられる。第3図はS1区斜面が出土した完形有茎両丸造りの鉄鏃である。三角形を呈する刃部が、やや丸みをもって内側へ入り、ほぼ同幅を保った後、ゆるやかに茎部に至る。全長11.0cm、刃部長2.8cm、刃部最大幅2.8cm、中央部は台形の板状を呈し、幅1.8cm、厚さ0.3cm、茎部幅0.5cm、厚さ0.4cm、中世のものと考えられる。第74図1は、S3区の芳ヶ谷1号古墳西側の斜面から出土した。用途は不明であるが、円形を呈する形状から、何らかの部品と考えられる。径2.5cm、幅1.0cm、厚さ0.4cmを測る。第74図2は、S1区斜

面から出土した。用途不明である。円形を呈し5.2cm、断面は、やや円形を呈する方形で1辺0.6cmを測る。第74図3は、S1区から出土した鉄鎌である。頸部は板状を呈し、刃部は全体に比して短い。刃部は両丸造りとしている。全長11.0cm、刃部2.5cm、頸部4.3cm、茎部4.2cm、厚さは3mm～4mmを測る。

銅 鏡 (第73図1)

芳ヶ谷1号古墳主体部から出土した獣形鏡と考えられる?製鏡である。面径8.4cm、高さ0.6cm、径1.3cmの鈕がついている。鏡面はほぼ平坦であるが、周縁部にわずかの反り(0.2cm)が見られる。厚さは、0.1～0.15cmであるが、周辺の無文帯の部分は、0.2cmである。文様は、鑄上りが悪く、不明瞭である。内区には、朱文と勾玉状を呈する文様4カ所に配されている。不鮮明である。勾玉状を呈する文様は、丸みをもっており細部の文様は見られない。手ずれによる磨滅によるものの可能性も考えられる。全体によく風化しており、淡い緑色を呈している。鏡面を上に向けて出土し、その下側に木質が残存していた。

玉 類 (第73図2～35)

芳ヶ谷1号古墳からは、銅鏡の他、玉類が出土した。玉類の出土状態は、鏡面に密着したものと鏡面よりやや離れて、浮いて出土したのものが見られ、鏡とは別に埋納されたと考えられる。出土した玉類は、勾玉、管玉、ガラス小玉が見られる。詳細については計測表参照。

(4) 小 結

調査の結果、本遺跡からは、弥生時代の集落跡と古墳が確認された。竪穴式住居跡は、尾根上平坦面から4軒と、尾根先端部斜面から1軒検出された。第1号住居跡は、方形プランを呈し、尾根先端部斜面から検出した。このため、掘り方の半ばは消滅している。消滅した部分は盛り上としていたと考えられる。第2号住居跡は、方形プランを呈し、斜面側に寄っているため、斜面側の掘り方が消滅している。第3号住居跡は、長方形プランを呈し、掘り方は完存している。第4・5号住居跡は、ともに円形プランを呈し、重複して検出された。新旧関係は、既述のように第4号住居跡が古いことが確認された。第4号住居跡は、地山面が傾斜しているため掘り方の約2/3が消滅しており、消滅した部分は盛り土としていたと考えられる。第5号住居跡は、掘り方の半ばが第4号住居跡と重複しているため検出することはできなかった。これらの住居跡群から出土した土器は、明瞭な差異が見られず、比較的短期間に営まれた集落と考えられるが、第4・5号住居跡が重複していることで明らかなように、全てが同一時期に営まれたと考えられない。出土した土器は、第3号住居跡内に集中して出土し、他の住居跡は少量の土器が出土しているにすぎない。このため、各住居跡の新旧関係について明らかにすることは若干困難ではあるが、次のように考えることができよう。第3号住居跡内から出土した土器は、弥生土器の基本的な組み合わせである壺・甕・鉢・高坏・甌が出土した。これらの土器を手がかりとして考えると、第3号住居と同時期と考えられるものは、第2号住居跡、第5号住居跡と考えられる。第1号住居跡は遺物が少量であるため明瞭にすることは困難であるが、周辺から出土した土器から、4号住居と同時期と考えられよう。従って本遺跡では、第1号住居跡・第4号住居跡が営まれた後、第2号住居跡・第3号住居跡・第5号住居跡が営まれたと考えられよう。

本遺跡の最奥部から、尾根を削平した三角形を呈する平坦面を検出した。この平坦面からは柱穴と考えられる小ピットが多数検出され、その配置・規模から、少なくとも1棟の建物跡が確認された。この平坦面からは、少量の弥生土器が出土した。この平坦面は、第5号住居跡の背面に位置しており、出土した土器から、第2号住居跡・第3号住居跡・第5号住居跡が営まれた時期と同時期と考えられる。この平坦面の用途については、遺物が少ないため明らかにすることは困難である。この平坦面の南側斜面から多量の土器群が出土しており、この土器の出土位置・状態から、この平坦面から流れ込んだと考えられる。この土器群が、この

平坦面の用途を考える手がかりとなると考えられる。出土した土器は、壺形土器・甕形土器が大部分を占めており、しかも、日常生活に使用した痕跡が顕著であったが、同時に高坏2点が出土した。この高坏は焼成は若干軟調であるが、ていねいな造りの土器である。この土器群の出土状態は長う子遺跡の6号住居跡周辺から出土した土器群と類似している。土器も本例と同様に日常生活に使用したものである。長う子遺跡からは、既述のように祭祀遺物に使用したと考えられる遺物が含まれることから、これらの土器群は祭祀に使用したものと考えられた。本例は、明確な祭祀遺物が含まれていないが、高坏が含まれること、および出土状態の類似性から考えて、検出した平坦面は祭祀を行うための場として使用された可能性がある。

さて、これら住居跡群が営まれた時期については、土器にその手がかりを求めることができる。出土した土器の内、甕形土器・壺形土器は、「くの字」状の口縁部の端部は、うすくなりつつ外反し平たくおさめるか、鋭くおさめるものであり、底部は丸底又は、丸底に近いものである。これらの特徴から本集落は、弥生時代後期後半に比定できよう。

なお、第2号土壙から、少量の土器が出土している。この土器の特徴は、外反する口縁部の端部を上下に拡張し、凹線をめぐらせ体部には、凹線をめぐらせた後、間をヘラによる刻みをめぐらせているものである。このような特徴は、池の土器よりも古い時期に位置づけることができる。しかし、第2号土壙以外に、このような土器を伴う遺構は検出されなかった。第2号土壙の直近に、古墳が築造されており、古墳が築造された際消滅した可能性が考えられる。

古墳は、尾根先端部から検出した。調査前の地形観察からは、墳丘・墳形を想定させる状態は観察されなかった。調査の結果、尾根先端部を尾根線に直交するように前後をカットして墓域として区画したことを確認した。丘陵の斜面側は地山整形の痕跡は見られなかった。従って、古墳の規模は、尾根前後を切断した掘り方を一応の目安として考えざるを得ない。その場合、本古墳は、短辺約8m、長辺約10m前後の規模をもつと考えられよう。墳形については明らかにできないが、掘り方の形状から方墳の可能性が高い。墳丘の高さについては、墳丘の大部分が流失したものと考えられ、残存する高さは、約20cm程度である。主体部の規模から考えて、1m前後の小規模なものであったと推定される。内部主体については、検出した土壙の形状から、径60cm前後の割竹形木棺を埋置したものと考えられ、尾根中心線より、南側斜面に寄った位置に検出した。主体部の土壙の東側小口部から副葬品が一括して出土し、頭位は東側と考えられる。副葬品は倣製獣形鏡1、勾玉2、管玉20～21点、ガラス小玉13点、刀子1点が出土した。鏡は、鏡面を上に出土し、裏面には木質が残存していた。鏡の出土状態・出土レベルは、木棺を埋置した部分の床面より一段高くなっているところから、木棺とは別の木製の容器に埋納したと考えられる。鏡以外の遺物は鏡面より若干浮いている玉類が見られるところから、鏡を納めた木製容器の外側に置いたと考えられる。

古墳の築造された時期について、古墳の位置、主体部、出土遺物から述べてみたい。古墳の位置は尾根先端部に単独で位置しており、前半期の古墳の特徴を示している。主体部は割竹形木棺であり、同じく古墳時代前半期の特徴を示していると言えよう。遺物は、鏡・玉類が出土しており、この点でも前半期の古墳の特徴を示していると言えよう。玉類の内勾玉は、C字形の古式の様相を呈し、管玉も、細身のものであって古式の様相を呈していると言えよう。以上のことから考えて、本古墳は、古墳時代前半期でも古式と考えられ、4世紀代に築造されたと考えて大過ないであろう。

付表 芳ヶ谷遺跡出土弥生土器観察表

単位 cm

図面No.	出土地点	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
第65図 1	第2号住居	壺	底径 5.4	壺の頸部以上を欠失したものである。器高と比して最大径が大きい。	内面 上半櫛歯状工具による調整, 下半櫛歯状工具による調整後ナデ 外面 上半ハケ目調整後ナデ, 下半櫛歯状工具による調整後ナデ	胎土良好 焼成良好 淡黄褐色
2	第3号住居	壺	口径 10.7 器高 17.2	「くの字」状に外反する口縁部の端部は平たくおさめる。底部は凹底気味である	内面 ヘラ削り後ナデ 外面 クシ歯状工具による調整後ナデ 口縁部 ヨコナデ	胎土良好 焼成良好 赤褐色
3	第3号住居	壺	口径 13.2 器高 18.1	外反する口縁部の端部は外反し平たくおさめる。底部は丸底である。底部に径0.8cmの凹みがある。	内面 ヘラ削り 外面 ヘラナデ調整 口縁部 クシ歯状工具による調整後ヨコナデ	胎土良好 焼成良好 橙褐色
4	第3号住居	甕	口径 14.0 器高 15.1	外反する口縁部の端部はうすくなり平らくおさめる。底部はわずかに平底である。	内面 ヘラ削り 外面 ハケ目調整後ナデ 口縁部 ヨコナデ	胎土良好 焼成良好 橙褐色 スス付着
5	第3号住居	壺	口径 17.0	「くの字」状に外反する口縁部の端部は丸くおさめる。	内面 ヘラ削り 外面 磨滅 口縁部 ヨコナデ	胎土良好 焼成良好 淡褐色
6	第3号住居	鉢	口径 14.5 器高 8.1	口縁部の端部はわずかに肥厚し丸くおさめる。底部は凹底である。	内面 ハケ目調整後ナデ 外面 ヘラナデ 底部は指頭整形	胎土良好 焼成良好 淡褐色
7	第3号住居	鉢	口径 10.0 器高 8.4	口縁部の端部は丸くおさめる。底部は尖り気味の丸底である。	内面 ヘラ削り後ナデ 外面 ヘラナデ 口縁部 指頭整形後ヨコナデ	胎土良好 焼成良好 橙褐色
8	第3号住居	鉢	口径 14.0 器高 6.5	口縁部の端部はわずかに内傾し丸くおさめる。底部は平底の痕跡をとどめる。	内面 ヘラ削り後ナデ 外面 ハケ目調整後ナデ 口縁部 ハケ目調整, ヨコナデ	胎土良好 焼成良好 暗赤褐色
9	第3号住居	鉢	口径 8.0 器高 4.6	口縁部の端部は平たくおさめる。底部は凹底気味である。	内面 ヘラ削り後ナデ 外面 ヘラナデ 口縁部 ヨコナデ	胎土良好 焼成良好 暗褐色

単位 cm

図面No.	出土地点	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
第66図 10	第3号住居	甑	口径 30.4 底径 8.8 器高 35.3	「ハの字」状に上方に開く。下部に突帯をめぐらせる。上下両口部は丸くおさめる。	3分割で成形している。 内面 上部ヨコナデ、ヘラ削り、中部ヘラナデ 下部 ヘラナデ、ヨコナデ 外面 上下両端はヨコナデ、他はハケ目調整後ナデ	胎土良好 焼成良好 暗赤褐色 内面にわずかにスス付着
11	第4・5号住居跡	鉢	口径 14.1 器高 9.7	口縁部は外反し端部は丸くおさめる。底部は凹底気味である。	内面 ヘラナデ 外面 ハケ目調整後ナデ 口縁部 ヨコナデ	胎土良好 焼成良好 橙色
12	第4号住居跡	壺	口径 13.4	「くの字」状に外反する口縁部の端部は平たく納める。	内面 ヘラ削り後ナデ 外面 ハケ目調整後 口縁部 ヨコナデ	胎土良好 焼成軟調 橙褐色
13	第3号住居跡	鉢	口径 10.8 器高 8.7	口縁部の端部はうすくなり丸くおさめる。底部は平底である。	内面 ヘラ削り後ナデ 外面 ハケ目調整、ヘラ研磨 口縁部 ヨコナデ	
14	第3号住居	高 坏	底径 14.2	「ハの字」状に開く脚部の端部は平たくおさめる。	内面 ヘラ成形、ヘラナデ 外面 ヘラナデ(?) 口縁部 ヨコナデ	胎土良好 焼成軟調 淡橙褐色
15	第5号住居	壺	口径 15.0	外反する口縁端部に内傾する施文帯を貼り付け複合口縁としている。	内面 ヘラ削り後ナデ 外面 ヘラナデ 口縁部の接合は指頭による。施文部は上下に凹線をめぐらせ、その間の波条文をめぐらせる。頸部に凸帯を貼り付ける。	胎土良好 焼成良好 橙色
16	第2号土壙	甕	口径 19.4	「く」の字状に外反する口縁部の端部を上下に拡張し、凹線を3条めぐらせる。	内面 ヘラ削り 外面 ナデ調整 肩部に削り出し突帯を施し凹線を2条めぐらせ、刻みを施す。 胴部に櫛歯による2条の施文	胎土良好 焼成良好 淡褐色 スス付着
17	第3号住居	鉢	口径 23.4 器高 14.5	口縁部の端部は平たくおさめる。底部は平底である。	内面 ヘラ削り後ナデ 外面 ハケ目調整 口縁部 ヨコナデ	胎土良好 焼成軟調 淡黄褐色 スス付着

単位 cm

図面No.	出土地点	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
第68図 18	S 6 区 斜面	高 坏	口径 5.4 底径 16.2 器高 20.7 ~ 19.6	口縁部の端部は外反し丸くおさめる。口縁部の体部は明瞭な段を有する。脚部はゆるやかに開き端部は丸くおさめる。	磨滅 脚部はしぼり成形。坏部底面は円板重点である。透しは3ヵ所に見られ、外部穿孔である。	胎土良好 焼成軟調 橙色
19	S 6 区 斜面	高 坏	口径 27.2 底径 16.2 器高 17.0 ~ 15.9	口縁部の端部は外反し、端部は平たくおさめる。短い脚部は端部に至って大きく開く。	坏部 内面ナデ、ヨコナデ。外面ヨコナデヘラナデ 脚部 内面しぼり成形後ヘラナデ。外面ヘラナデ、ヨコナデ透かしは5ヵ所、外面穿孔	胎土良好 焼成軟調 橙色
20	S 6 区 斜面	甕	口径 23.0 器高 9.0	外反する口縁部の端部はうすくなり丸くおさめる。底部は平底の痕跡残存。	内面 ヘラ研磨 外面 ハケ目調整 口縁部 ヨコナデ後ヘラ研磨	胎土良好 焼成良好 赤褐色 スス付着
21	S 6 区 斜面	壺	口径 12.2	「くの字」状に外反する口縁部の端部は平たくおさめる。	内面 ヘラ削り後ナデ 外面 ヘラナデ 口縁部 ヨコナデ 肩部にヘラにより押し引き文を施す	胎土良好 焼成良好 赤褐色
22	S 6 区 斜面	壺	口径 11.4	「くの字」状に外反する口縁部の端部は平たくおさめる。	内面 ヘラ削り 外面 ハケ目調整 口縁部 ヨコナデ 頸部に烈点文を施す	胎土良好 焼成良好 赤褐色
23	S 6 区 斜面	甕	口径 12.7 器高 16.5	「くの字」状に外反する口縁部の端部は平たくおさめる。底部は凹底気味である。	内面 ヘラ削り後ナデ 外面 ハケ目調整 口縁部 ヨコナデ	胎土良好 焼成良好 暗赤褐色 スス付着
24	S 6 区 斜面	甕	口径 13.6	「くの字」状に外反する口縁部の端部は平たくおさめる。	内面 ヘラ削り後ナデ 外面 ハケ目調整後ナデ 口縁部 ヨコナデ 肩部にヘラによる刻みを施す	胎土良好 焼成良好 暗褐色 スス付着
25	S 6 区 斜面	壺	口径 12.0	「くの字」状に外反する口縁部の端部はうすくなり平たくおさめる。	内面 ヘラ削り後ナデ 外面 ハケ目調整後ナデ 口縁部 ヨコナデ	胎土良好 焼成良好 橙褐色

単位 cm

図面No.	出土地点	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
26	S 6 区 斜面	甕	口径 14.3	「くの字」状に外反する口縁部の端部はうすくなり平たくおさめる。	内面 ヘラ削り 外面 ハケ目調整後ナデ 口縁部 ヨコナデ	胎土良好 焼成良好 淡褐色 スス付着
27	S 6 区 斜面	壺	底径 4.0	凹底気味の底面である。	内面 ヘラ削り後ナデ 外面 ハケ目調整後ナデ 底面 ヘラ整形後ナデ	胎土良好 焼成軟調 橙色
28	S 6 区 斜面	壺	底径 4.0	高台状を呈する底部である。	内面 ヘラ削り 外面 磨滅 高台部は削り出しと思われる。	胎土良好 焼成軟調 橙色
29	S 6 区 斜面	壺	現有高 8.0	扁平な胴部で、底部は丸底である。	内面 ナデ調整 外面 ヘラナデ 頸部 ヨコナデ 底部に棒状工具による刺突1が見られる。	胎土良好 焼成良好 赤褐色
30	S 6 区 斜面	糸巻き状土製品	高さ 5.9 最大径 6.4	糸巻き状を呈し、片側端部に凹みがある。	両端部は指頭整形後ナデ、他はヘラナデ	胎土良好 焼成良好 褐色
31	S 6 区 斜面	不明	径 9.4 (推定)	全形は不明であるが復元平面形は分銅形を呈すると考えられる。中央部に孔1残存。	全面 中心部に棒状工具による穿孔	胎土良好 焼成良好 赤褐色
32	S 1 区 表土	壺	口径 15.6	「逆L字」状に外反する口縁部の端部は平たくおさえる。	内面 ヘラ削り後ナデ 外面 施文部以上はヨコナデ、以下磨滅 口縁部 ヨコナデ 櫛歯状工具により刺突が部分的に見られる。	胎土良好 焼成軟調 淡褐色 スス付着
33	表 採	壺	口径 13.6	「くの字」状に外反する口縁部の端部は平たくおさめる。	内面 ヘラ削り 外面 ハケ目調整後ナデ 口縁部 ヨコナデ 頸部にヘラ刻みを施す	胎土良好 焼成良好 橙褐色
34	表 採	壺	口径 12.8	「くの字」状に外反する口縁部の端部は平たくおさめる。	内面 ヘラ削り 外面 ナデ調整 口縁部 ヨコナデ	胎土良好 焼成良好 橙色

単位 cm

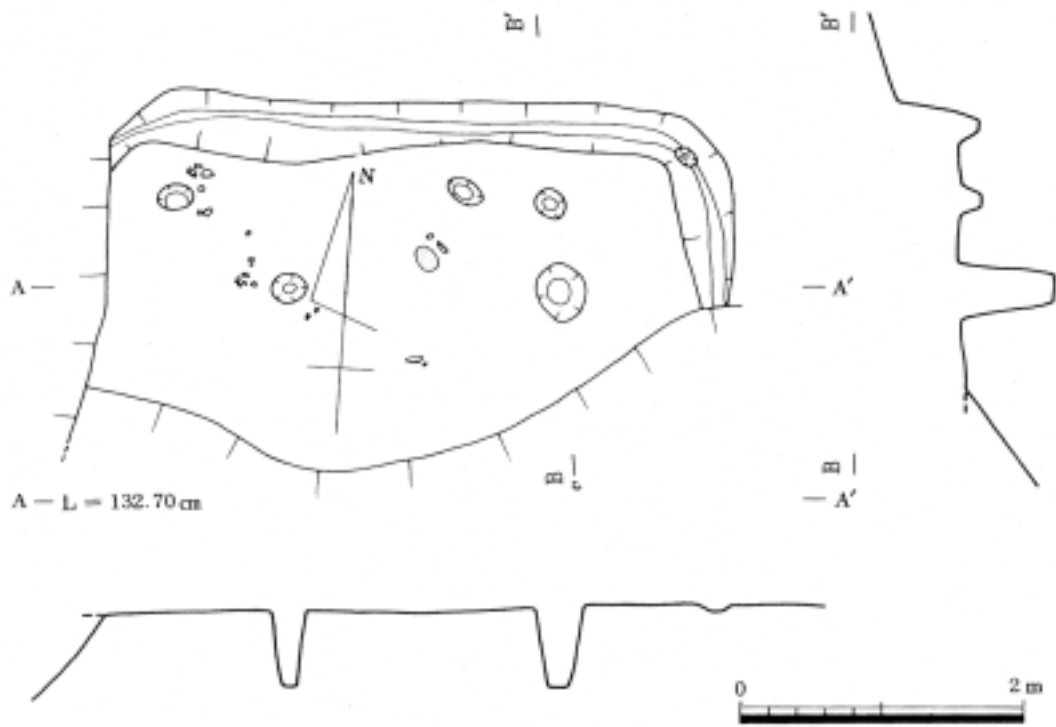
図面No.	出土地点	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
35	S 1 区	甌(?)	底径 2.6	平底の底部に穿孔の痕跡がある。	内面 ヘラ削り 外面 ヘラ研磨, ハケ目調整 底面は指頭調整	胎土砂粒多 焼成良好 淡赤褐色 スス付着
36	S 1 区	鉢	口径 6.2 器高 4.0	手づくね土器である。	内面 指頭成形後ナデ 外面 指頭成形 口縁部 ヨコナデ	胎土良好 焼成良好 暗褐色
第70図 37	N 1 区	甕	口径 20.8	「逆L字」状に外反する口縁部の端部は平たくおさめ, 凹線を2条めぐらせる。	内面 ヘラナデ 外面 ハケ目調整後ナデ 口縁部 ヨコナデ	胎土良好 焼成良好 淡褐色 スス付着
38	S 5 区	鉢	口径 12.8 器高 6.2	口縁部の端部は平たくおさめ, 底部は平底としている。	内面 ヘラ削り後ナデ 外面 ハケ目調整後ナデ 口縁部 ヨコナデ	胎土良好 焼成良好 橙褐色
39	調査区外 表 採	鉢	底径 1.8	口縁部は外反するが端部は欠失している。底部は凹底気味である。	内面 ナデ, ヘラ研磨 外面 ハケ目調整後ヘラ研磨	胎土良好 焼成良好 淡褐色
40	S 1 区	鉢	口径 4.2 器高 2.5	手づくねの尖底気味の鉢である。ミニチュアか。	内面 指頭成形後ハケ目調整 外面 指頭調整	胎土砂粒多 焼成軟調 暗褐色
41	N 1 区	高坏	底径 18.5	高坏脚端部である。端部は上下に拡張し凹線を施す。	内面 ヘラナデ 外面 ヘラナデ 端部 ヨコナデ	胎土良好 焼成軟調 淡褐色
42	S 1 区	高坏	口径 20.2	高坏の坏部である。口縁部と体部の境界は明瞭な段を有し, 口縁部端部は丸くおさめる。	内面 ナデ調整 外面 ヘラナデ 口縁部 ヨコナデ	胎土良好 焼成軟調 褐色

単位 mm

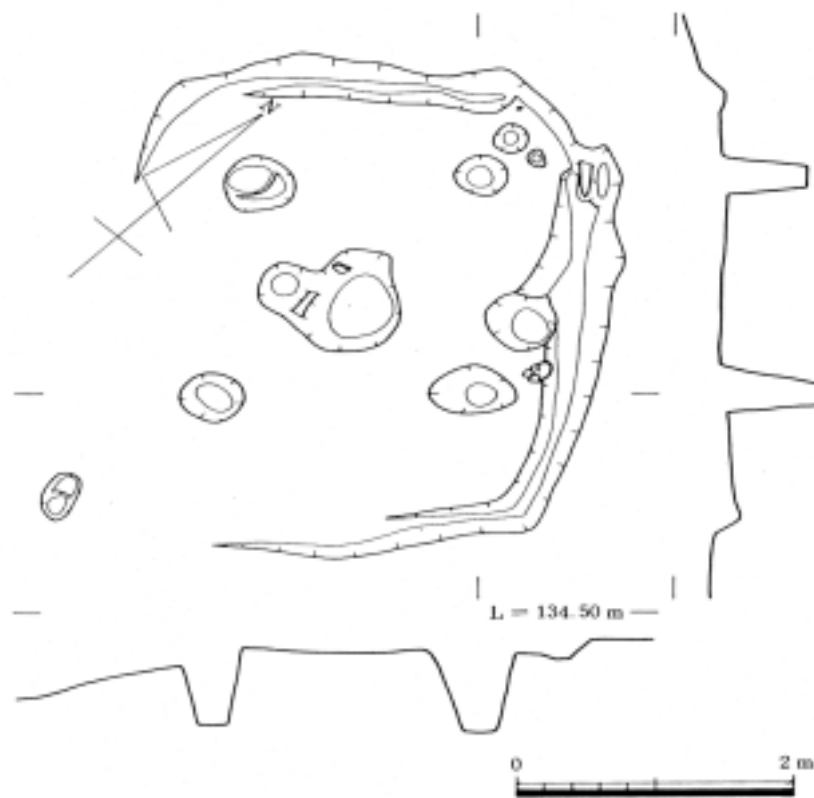
番号	種類	長さ	径	材質	備考	番号	種類	長さ	径	材質	備考
2	勾玉	30.0	10~8.0	碧玉		21	管玉	14.5	4.0	緑色凝灰岩	一部欠失
3	"	29.0	10~8.5	"		22	"	現長14.0	4.0	"	一部折損
4	管玉	28.5	3.5	緑色凝灰岩		23	ガラス小玉	2.5	5.0	ガラス	淡ブルー
5	"	27.0	4.0	"	鏡に錆着	24	"	3.5	3.5	"	コハルトフブルー
6	"	28.5	4.0	"	"	25	"	3.0	3.5	"	紫ブルー
7	"	28.0	4.0	"	"	26	"	3.0	3.5	"	コハルトフブルー
8	"	25.0	4.0	"	赤色顔料付着	27	"	3.0	3.5	"	"
9	"	27.0	4.0	"	風化顕著砂岩(?)	28	"	3.0	3.5	"	コハルトフブルー緑青付着
10	"	25.0	4.0	"	赤色顔料付着	29	"	3.0	4.0	"	"
11	"	25.0	4.0	"		30	"	2.0	3.5	"	コハルトフブルー上下両面研磨
12	"	25.5	4.0	"	赤色顔料付着	31	"	3.0	4.0	"	紫ブルー
13	"	24.5	4.0	"	"	32	"	2.0	3.0	"	コハルトフブルー
14	"	24.0	4.0	"	"	33	"	2.0	2.5	"	青緑灰着色
15	"	25.5	4.0	"	"	34	"	1.0	3.0	"	"
16	"	24.0	4.0	"	風化顕著	35	"	3.5	不明	"	青破灰色損
17	"	22.0	4.0	"	赤色顔料付着						
18	"	22.0	4.0	"	刀子に錆着						
19	管玉	18.5	3.5	"	赤微量顔料着						
20	"	20.0	4.0	"	"						



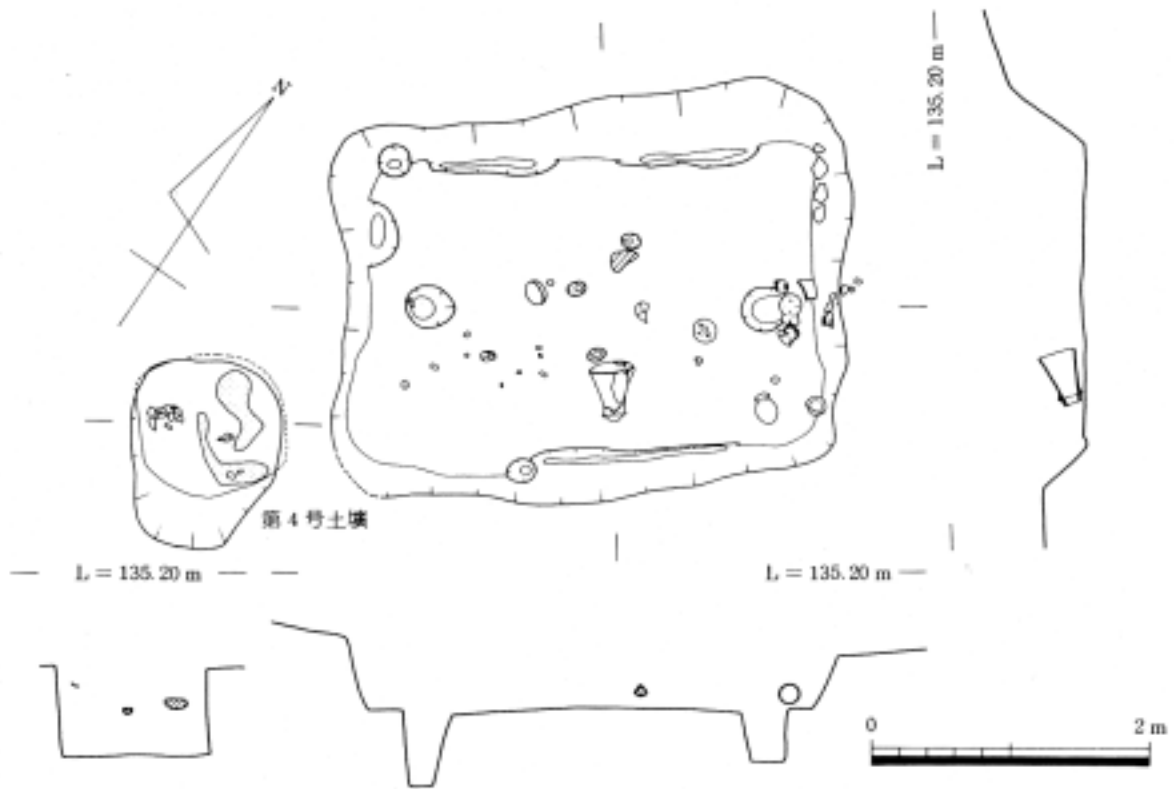
第 53 図 芳カ谷遺跡地形図及び遺構配置図



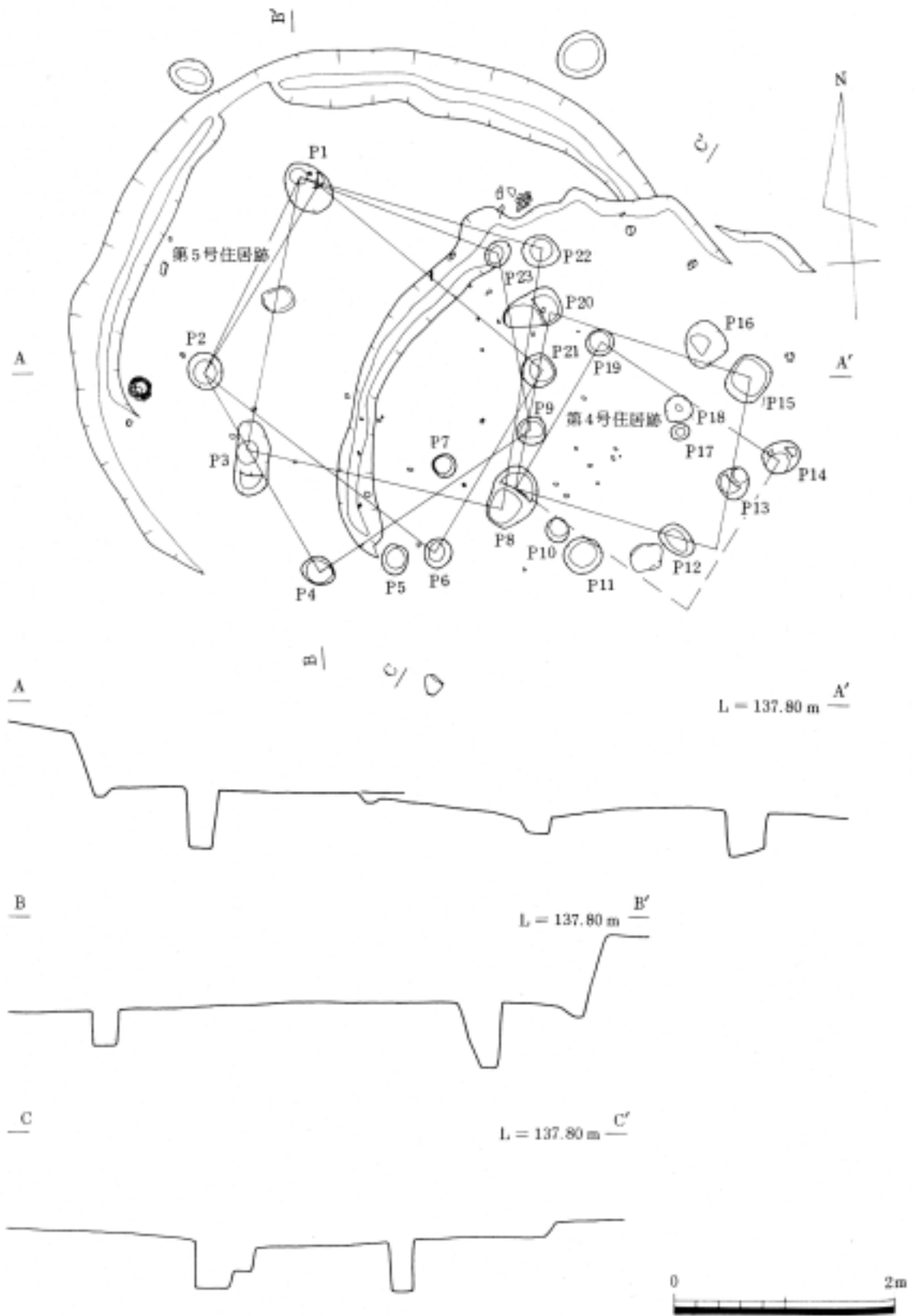
第54図 芳カ谷遺跡第1号住居跡実測図



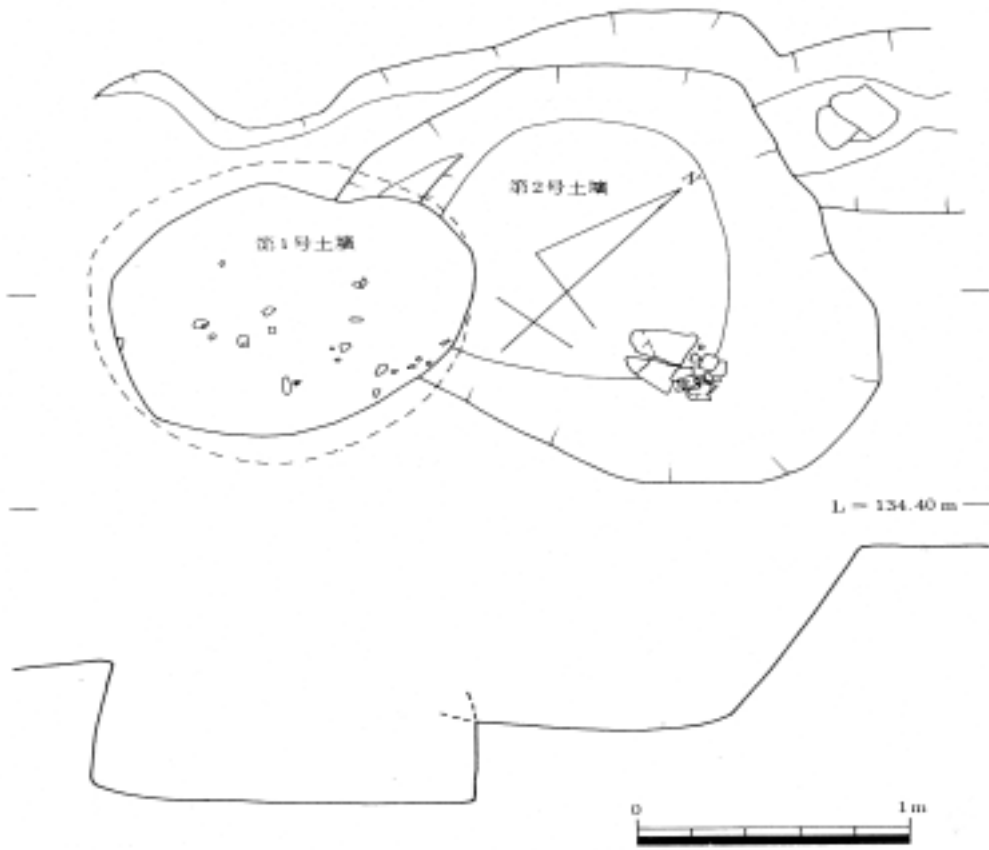
第55図 芳カ谷遺跡第2号住居跡実測図



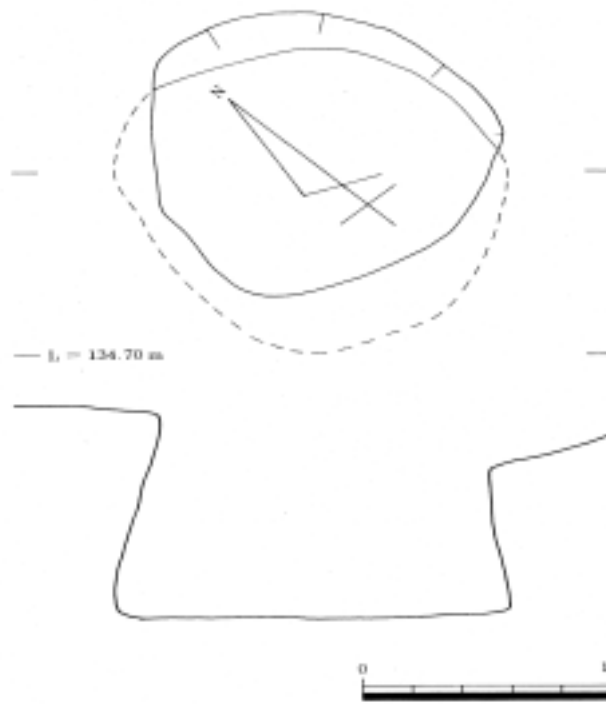
第56図 芳ヶ谷遺跡第3号住居跡実測図及び第4号土壌実測図



第57図 芳カ谷遺跡第4・5号住居跡実測図



第58図 芳カ谷遺跡第1・2号土壌実測図



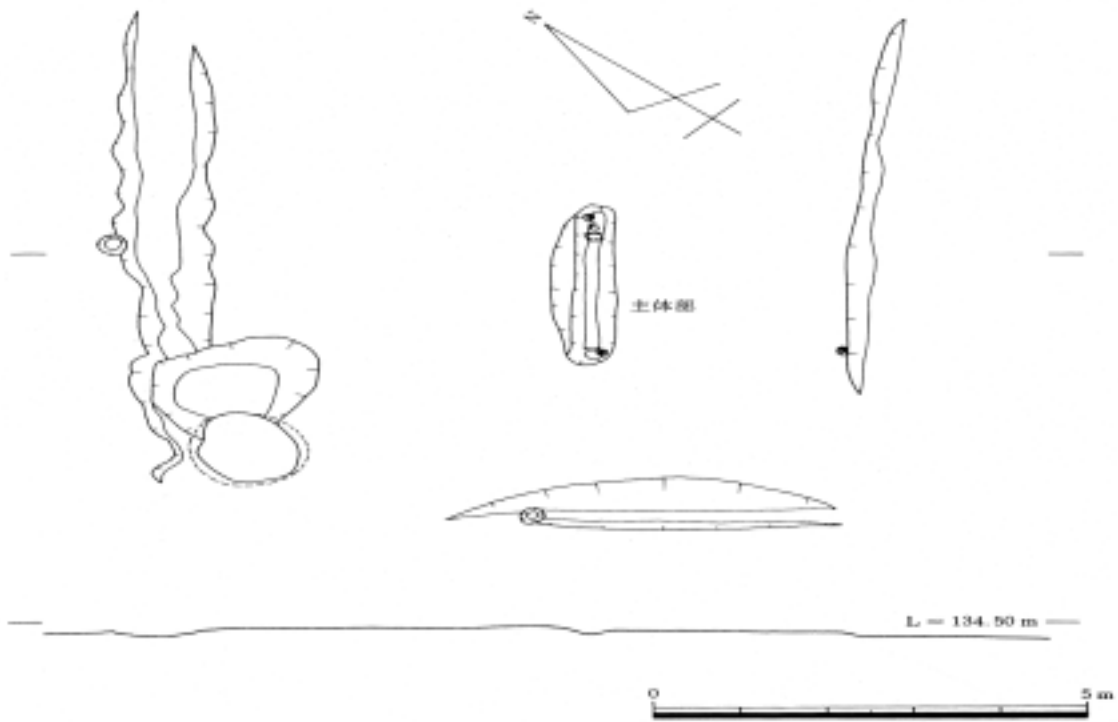
第59図 芳カ谷遺跡第3号土壌実測図



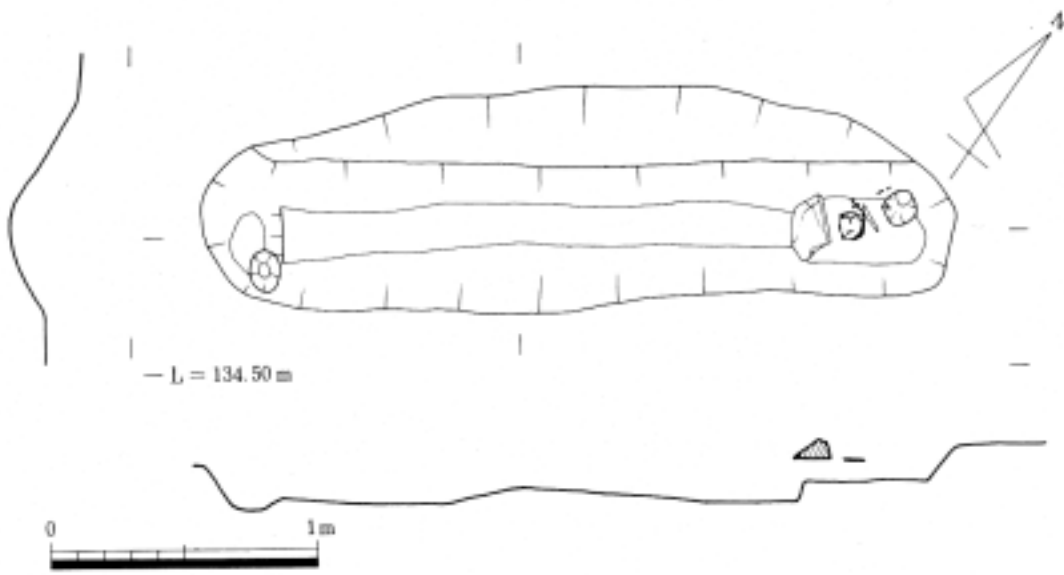
— L = 138.00 m —



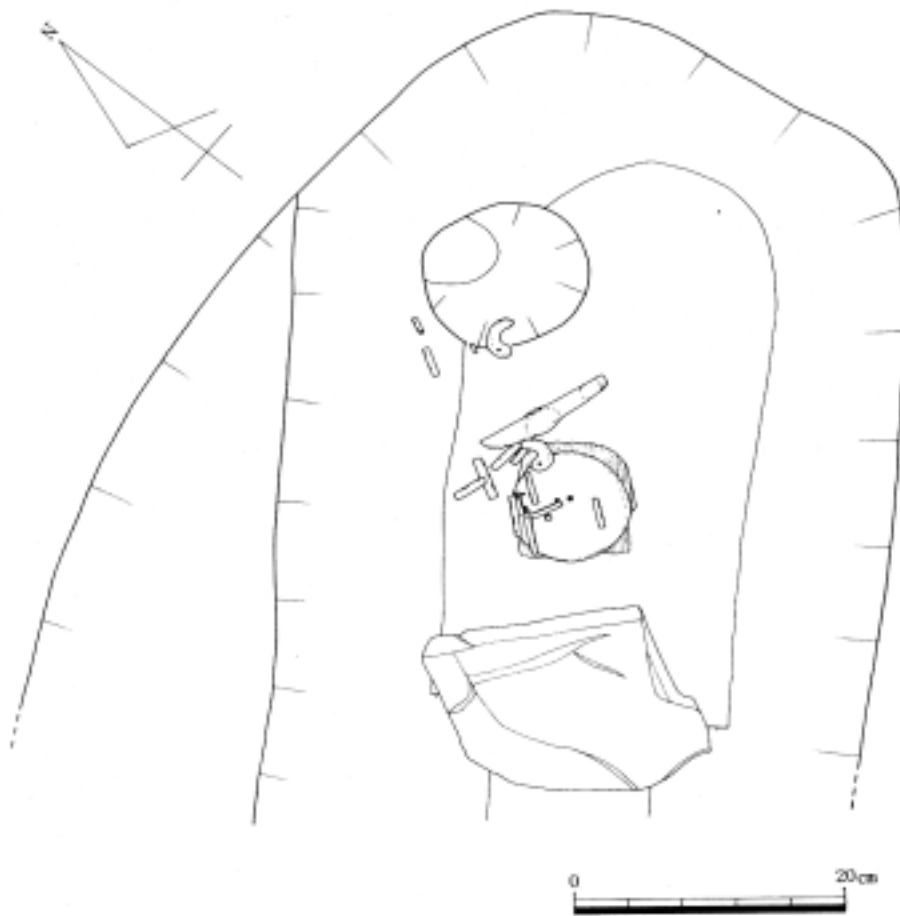
第60図 芳カ谷遺跡第5号土壙実測図



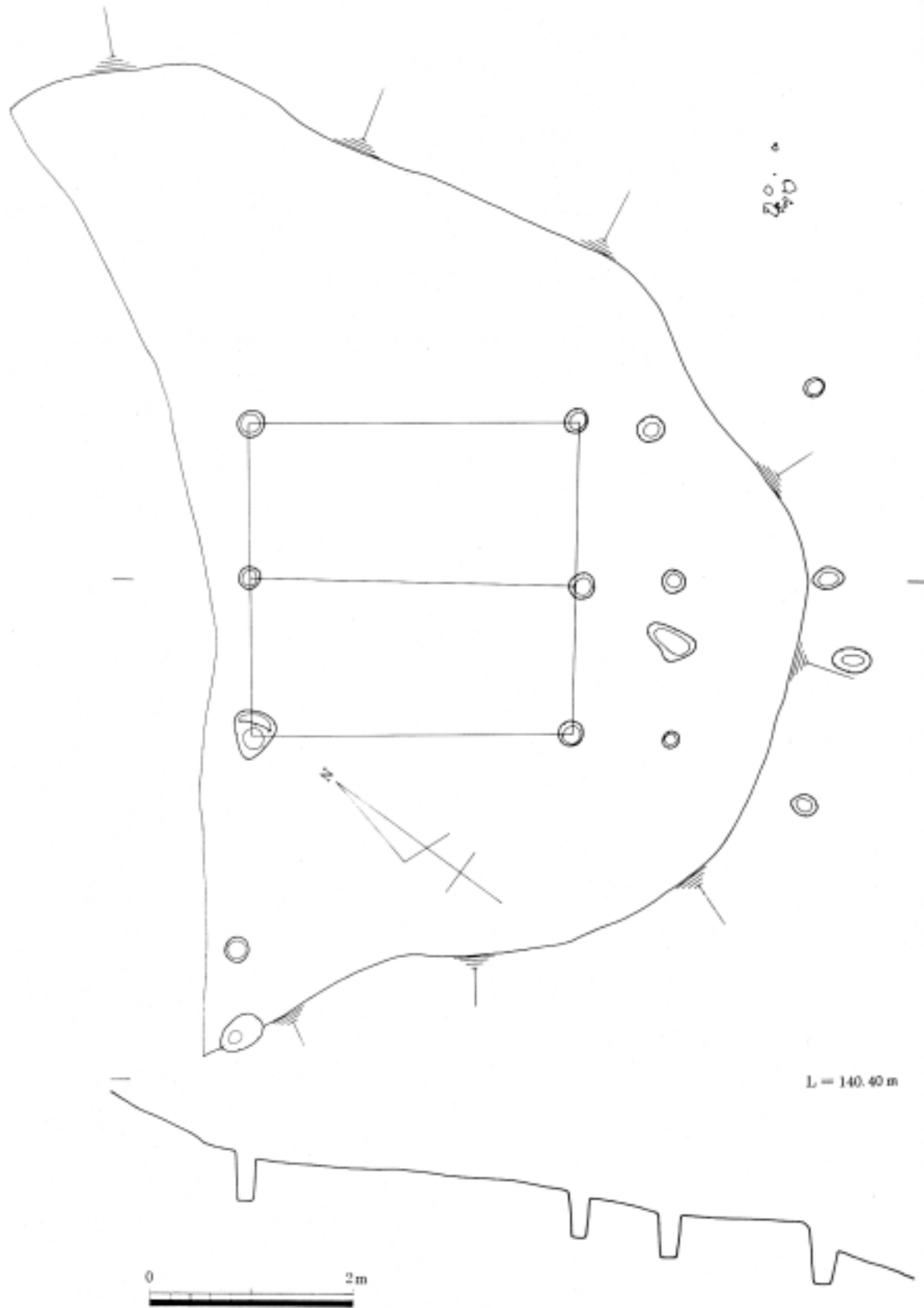
第61図 芳カ谷1号古墳遺構配置図



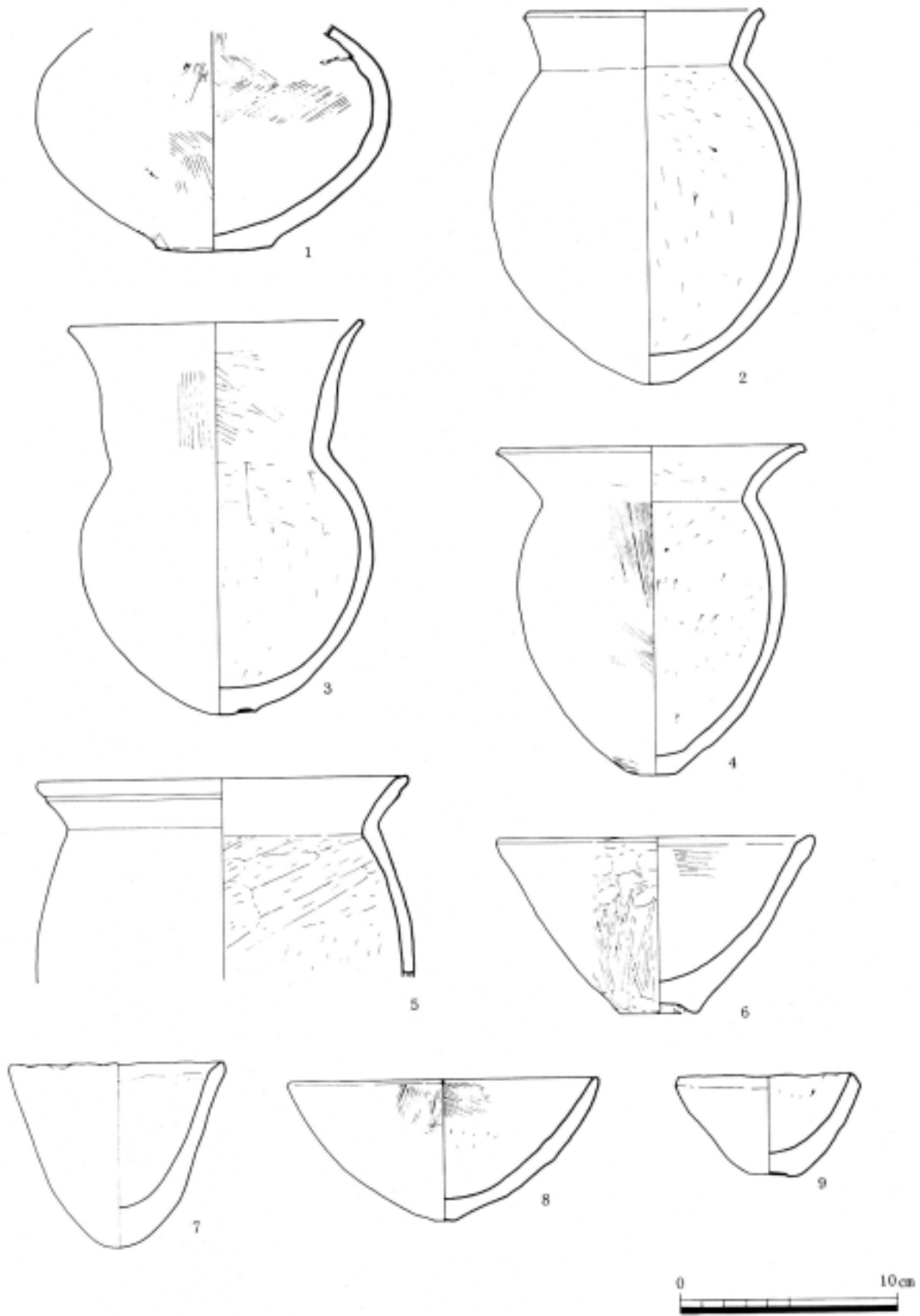
第 62 図 芳ヶ谷 1 号古墳主体部実測図



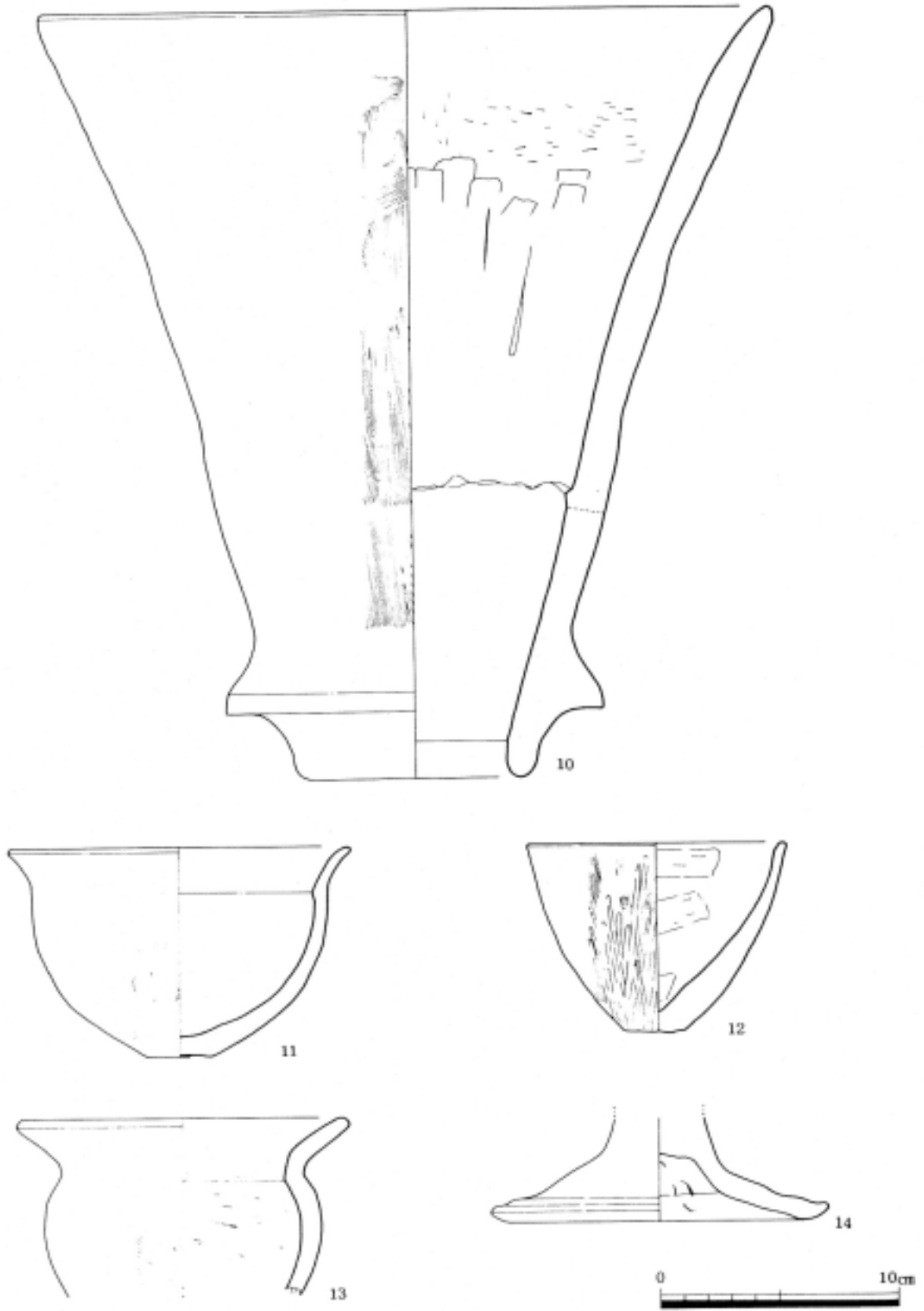
第 63 図 芳ヶ谷 1 号古墳主体部遺物出土状態実測図



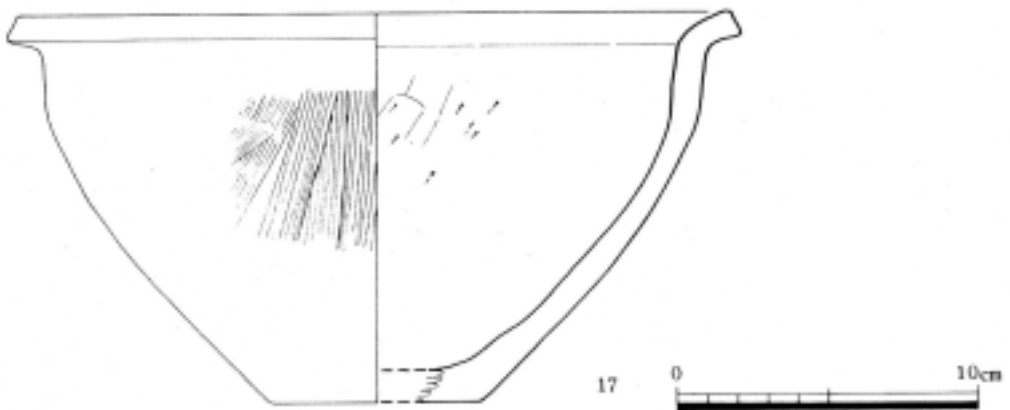
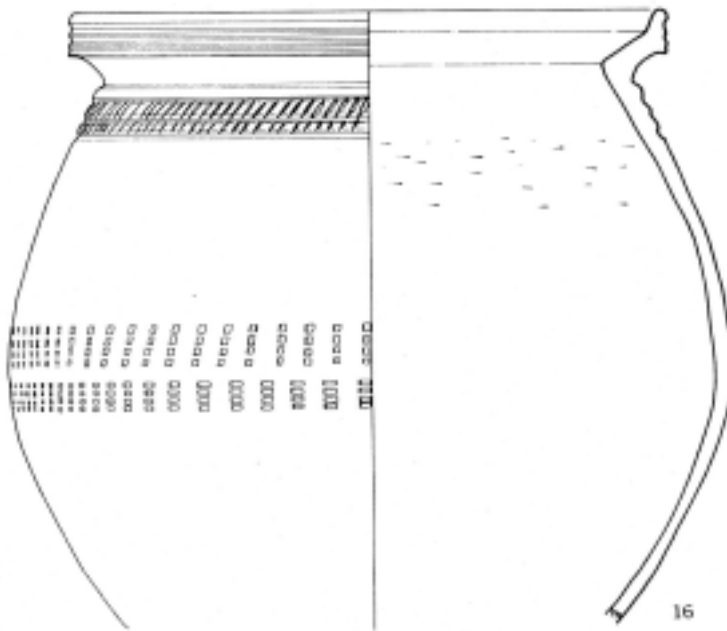
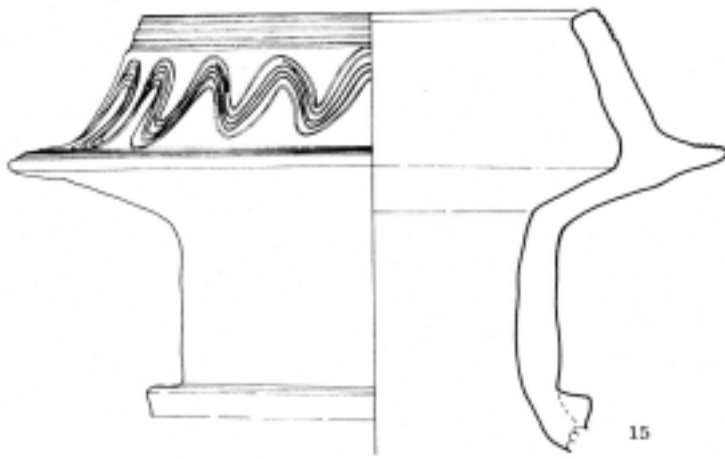
第64図 芳ヶ谷遺跡掘立柱建物跡実測図



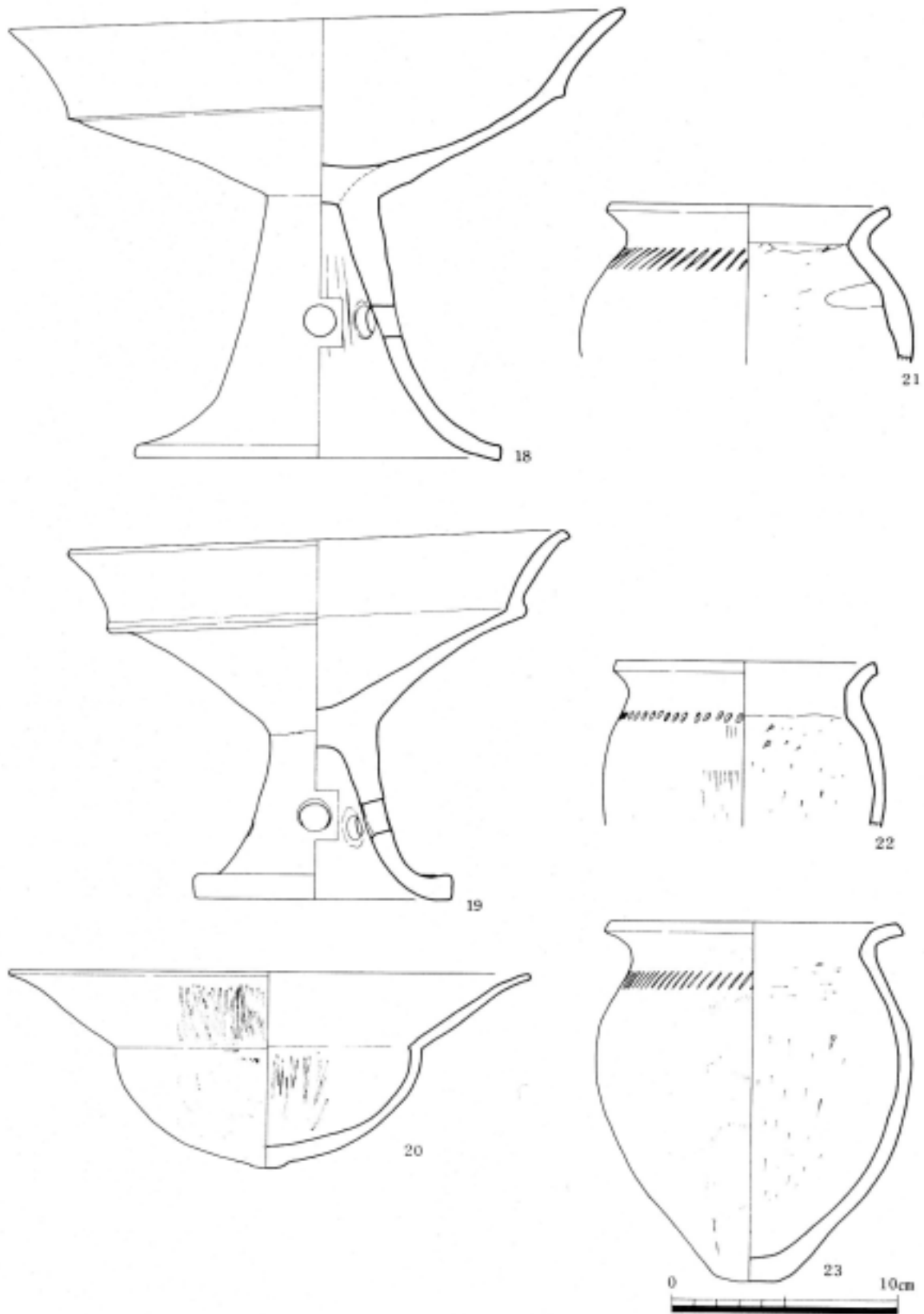
第 65 図 芳ヶ谷遺跡出土弥生土器実測図(1)



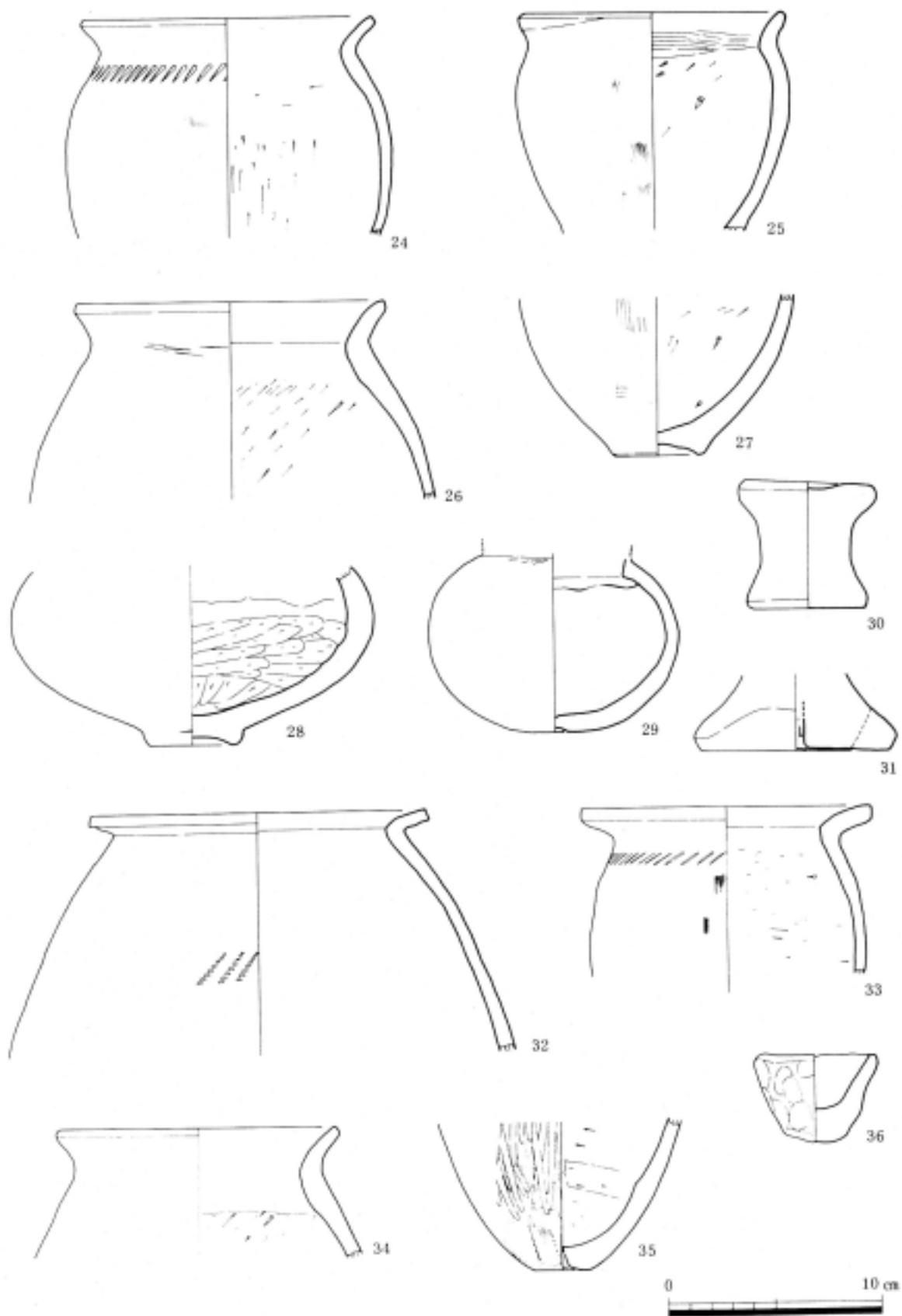
第66図 芳ヶ谷遺跡出土弥生土器実測図(2)



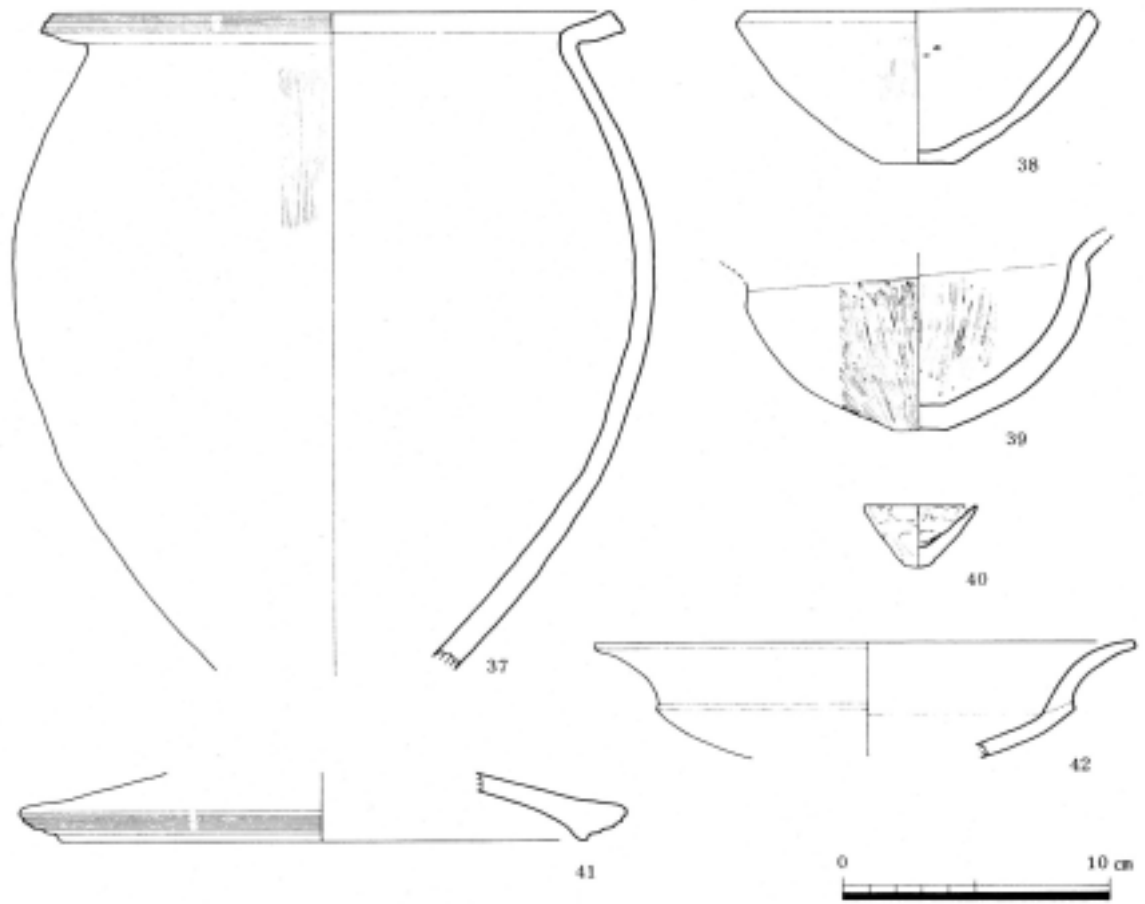
第 67 図 芳ヶ谷遺跡出土弥生土器実測図(3)



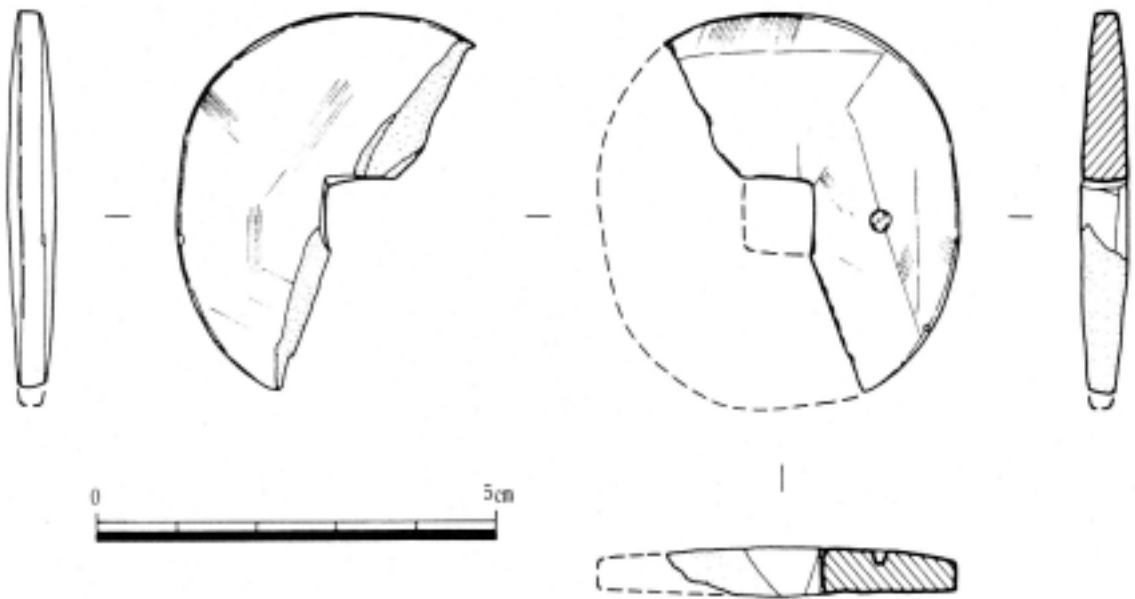
第68図 芳ヶ谷遺跡出土弥生土器実測図(4)



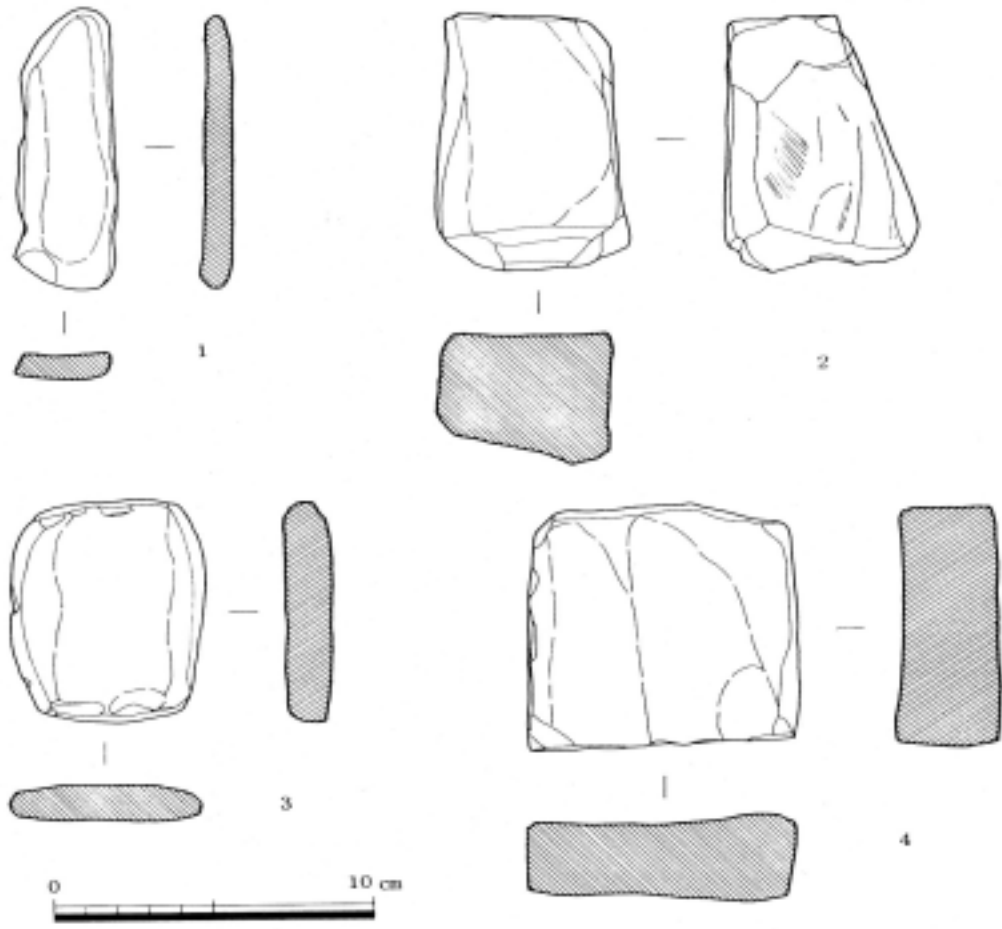
第 69 図 芳ヶ谷遺跡出土弥生土器実測図(5)



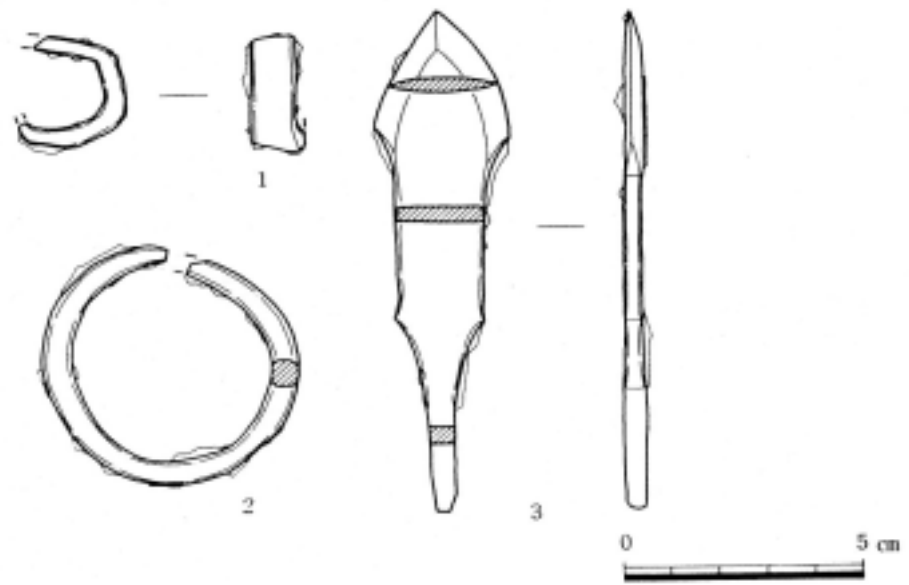
第70図 芳カ谷遺跡出土弥生土器実測図(6)



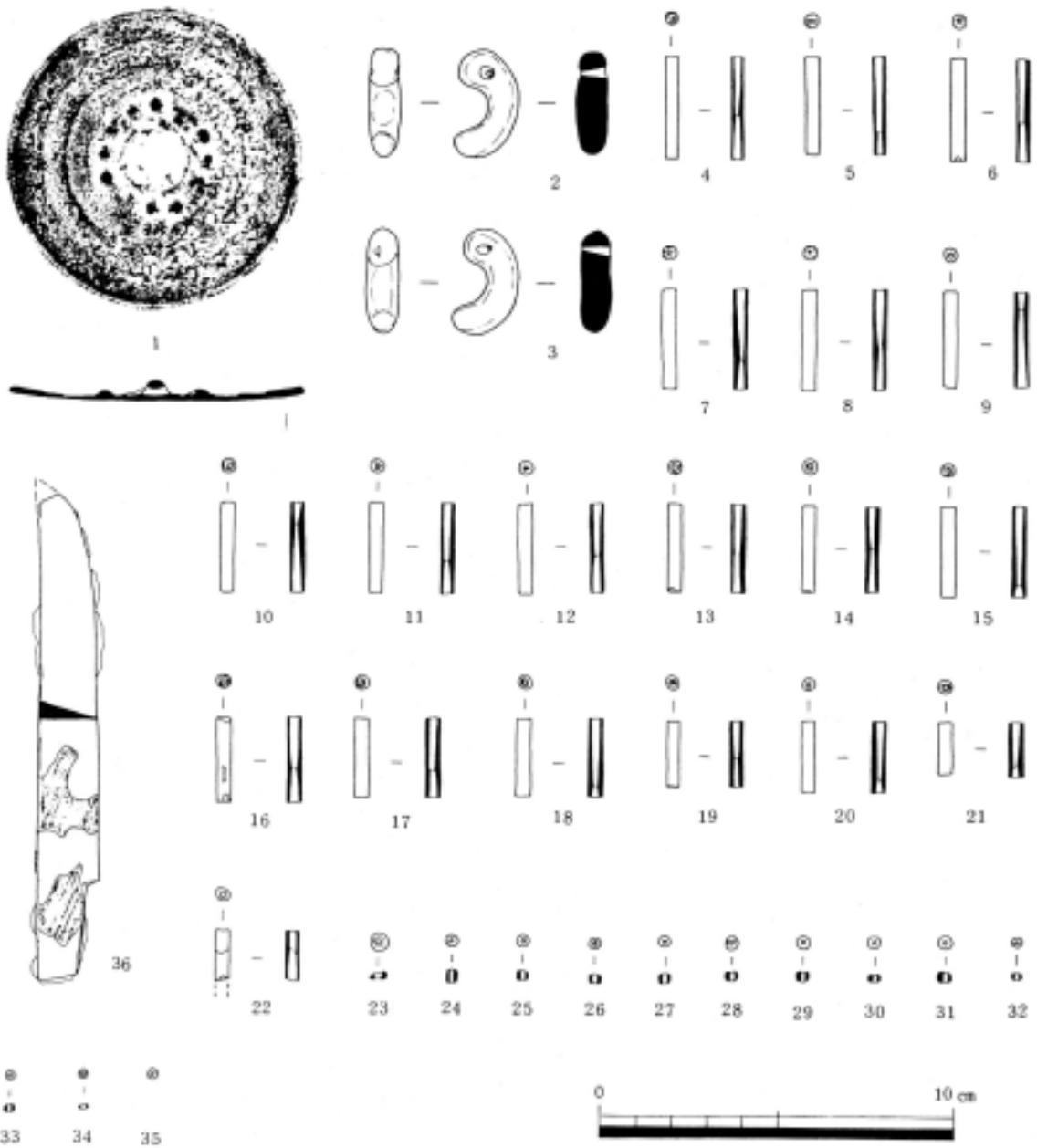
第71図 芳カ谷遺跡出土紡錘車状石製品実測図



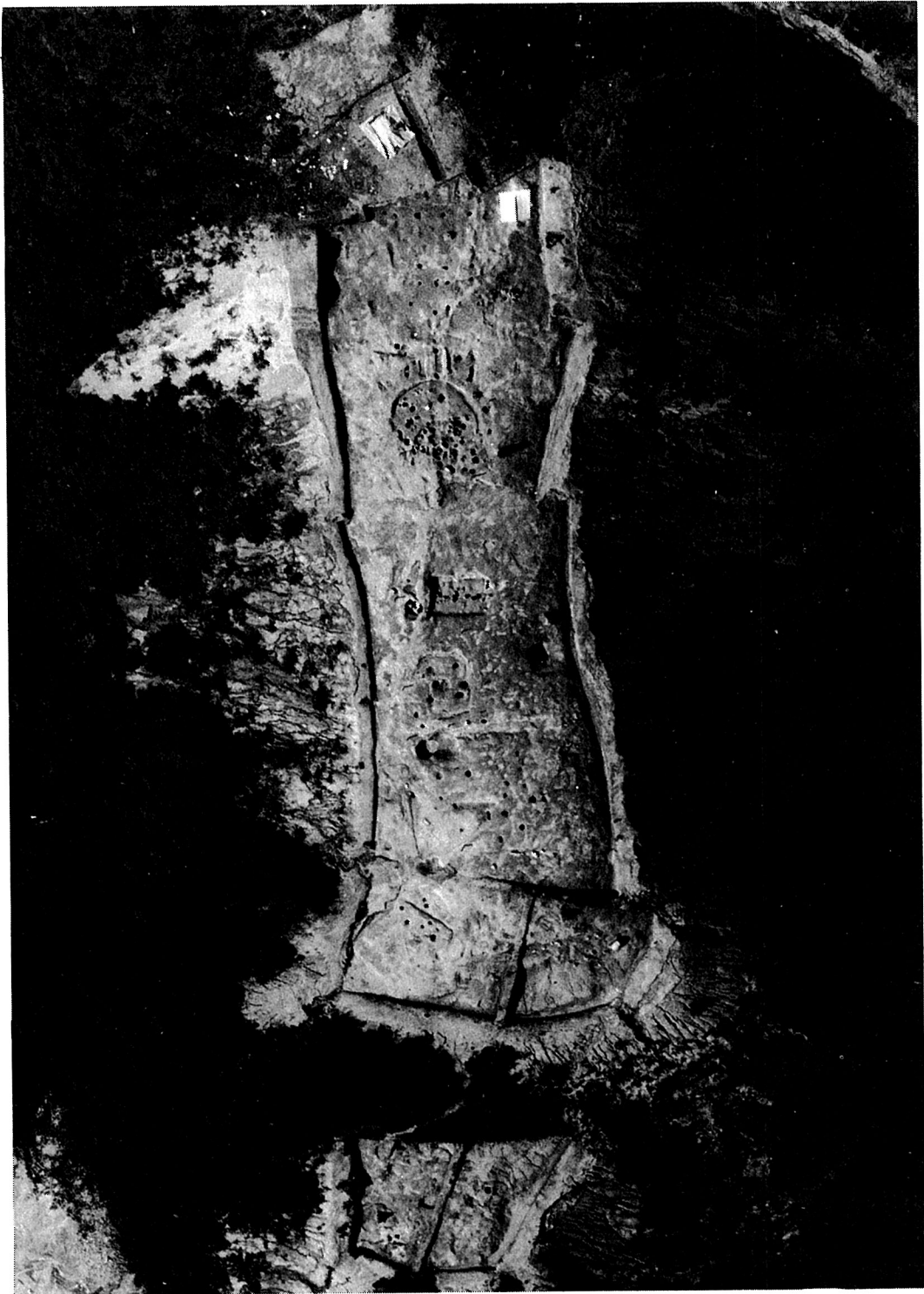
第72図 芳ヶ谷遺跡出土砥石実測図



第74図 芳ヶ谷遺跡出土鉄製品実測図



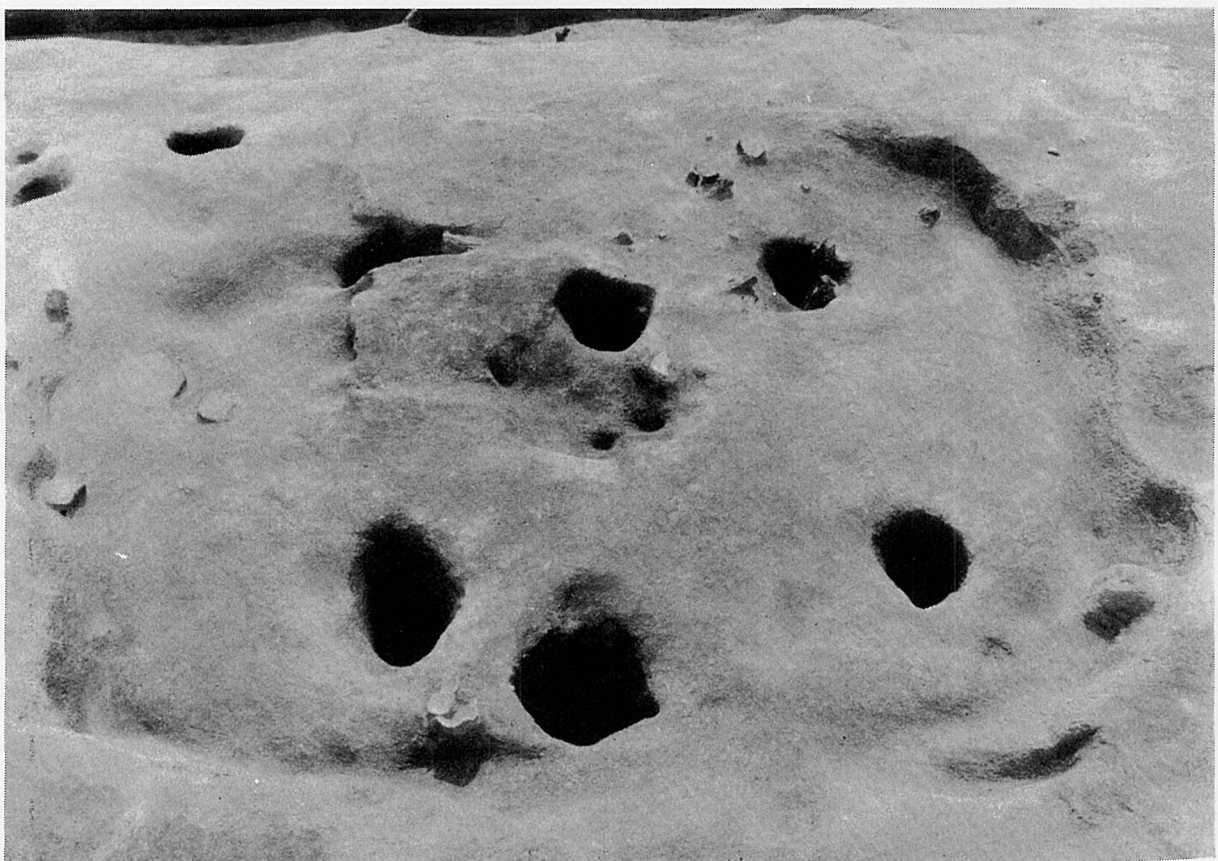
第73図 芳ヶ谷1号古墳出土遺物実測図



芳力谷遺跡全景



a. 芳カ谷遺跡第1号住居跡(南西より)



b. 芳カ谷遺跡第2号住居跡



a. 芳カ谷遺跡第3号住居跡(南東より)



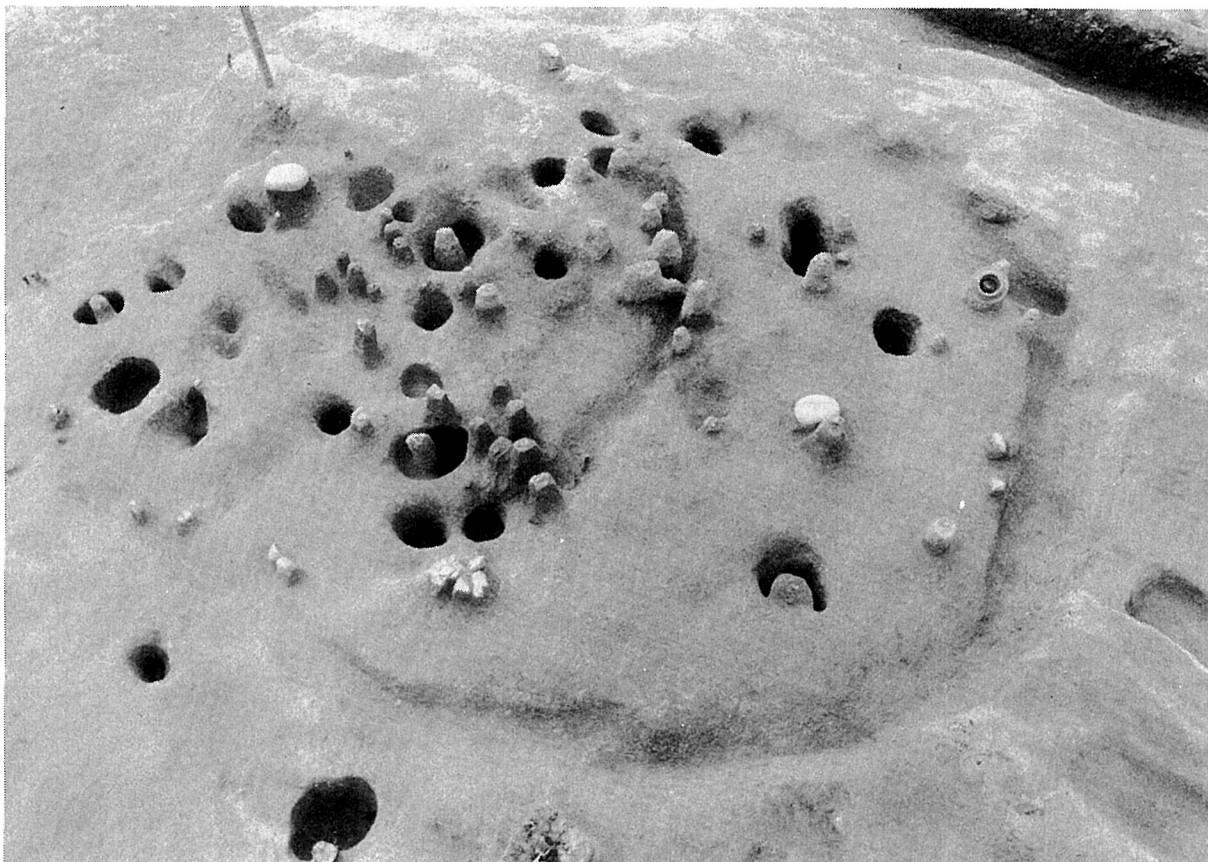
b. 芳カ谷遺跡第3号住居跡(北東より)



a. 芳カ谷遺跡第3号住居跡遺物出土状態（東より）



b. 芳カ谷遺跡第3号住居跡遺物出土状態（南より）



a. 芳カ谷遺跡第 4.5 号住居跡（北より）



b. 芳カ谷遺跡第 5 号住居跡内紡錘車状石製品出土状態（北より）



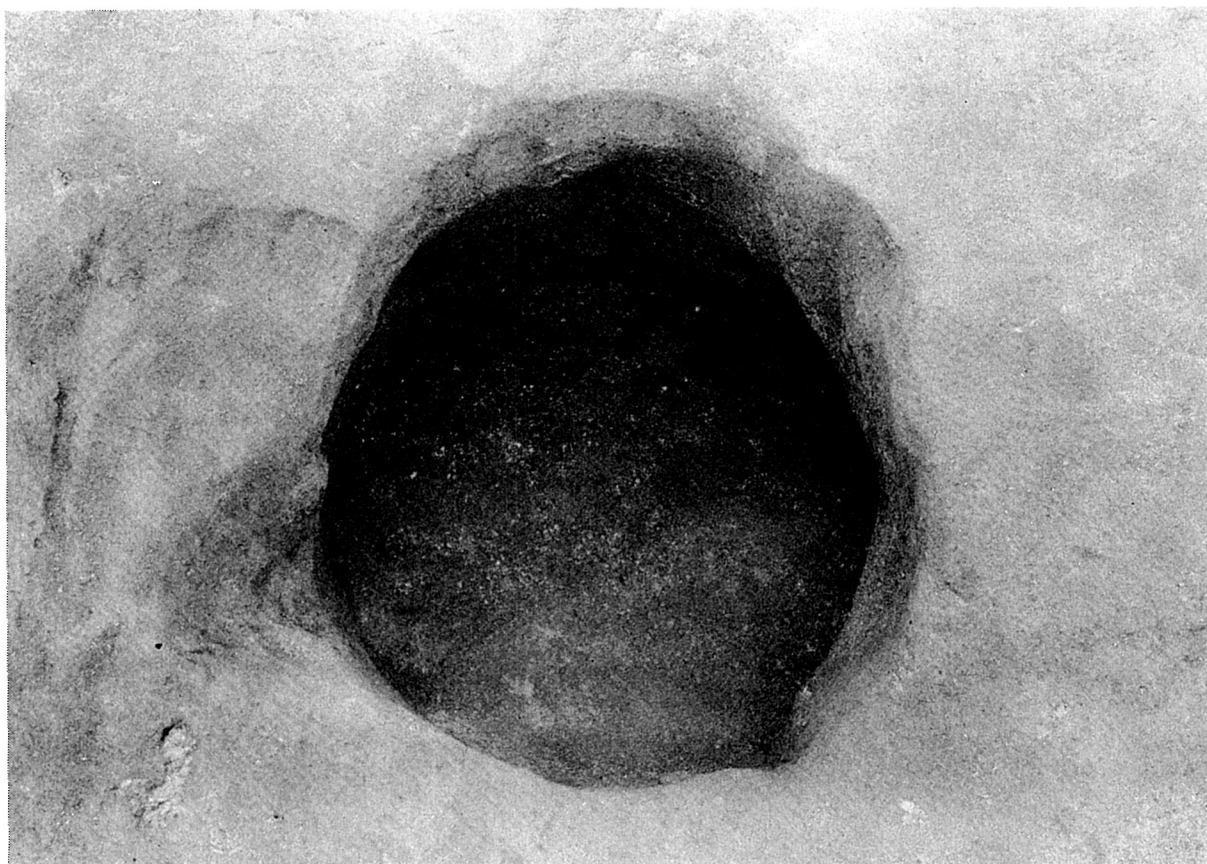
a. 芳カ谷遺跡第4号住居跡内遺物出土状態（南より）



b. 芳カ谷遺跡第5号住居跡内遺物出土状態（南より）



a. 芳カ谷遺跡第1.2号土壙（北東より）



b. 芳カ谷遺跡第3号土壙（北東より）



a. 芳カ谷遺跡第4号土壙（南東より）



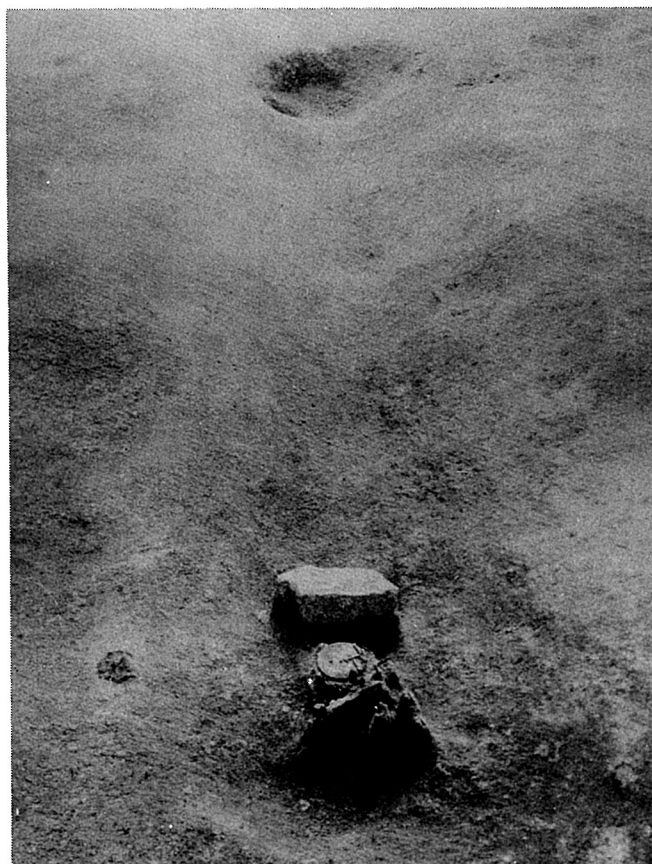
b. 芳カ谷遺跡第5号土壙（南東より）



a. 芳カ谷1号古墳全景



b. 芳カ谷1号古墳石列(南西より)



a. 芳カ谷1号古墳主体部全景



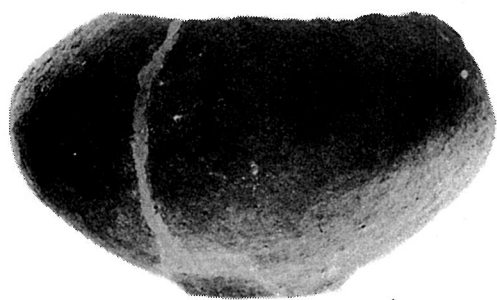
b. 芳カ谷1号古墳遺物出土状態



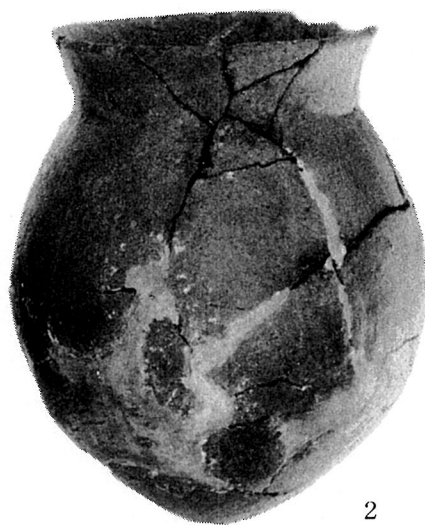
a. 芳カ谷1号古墳周溝（北東より）



b. 芳カ谷遺跡掘立柱建物跡



1



2



3



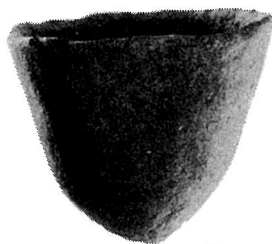
4



5



6



7



8



9

芳カ谷遺跡出土弥生土器(1)



芳カ谷遺跡出土弥生土器(2)



15



16

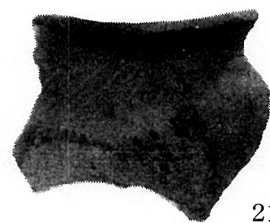


17

芳カ谷遺跡出土弥生土器(3)



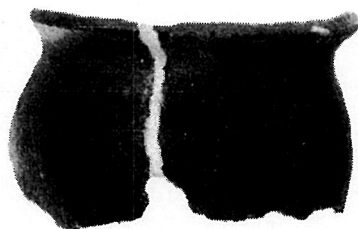
18



21



19



22

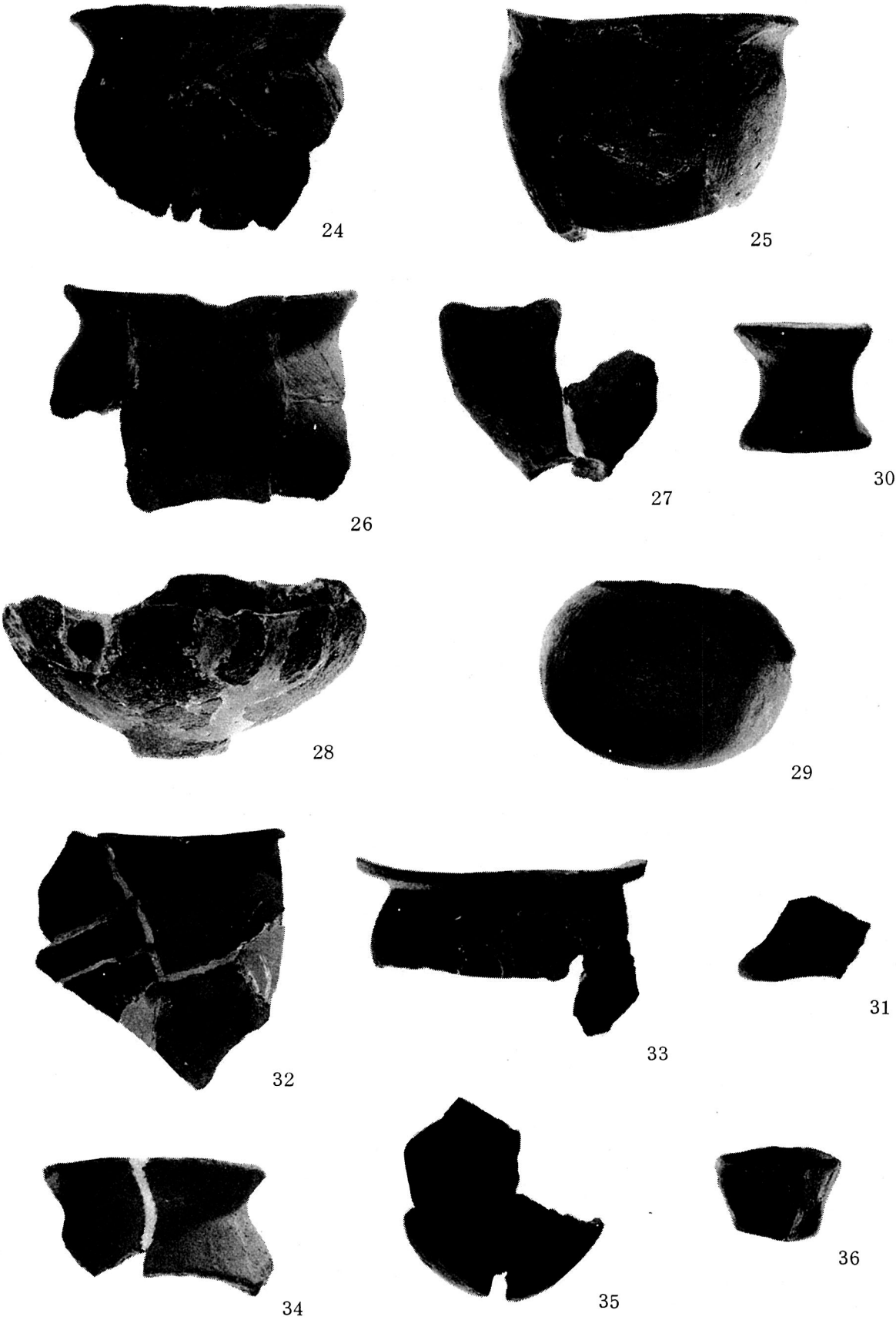


20

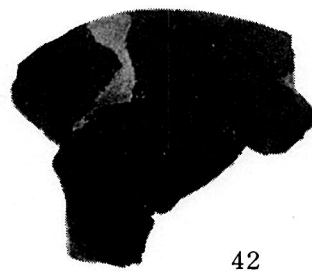
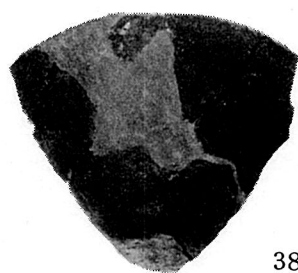


23

芳力谷遺跡出土弥生土器(4)



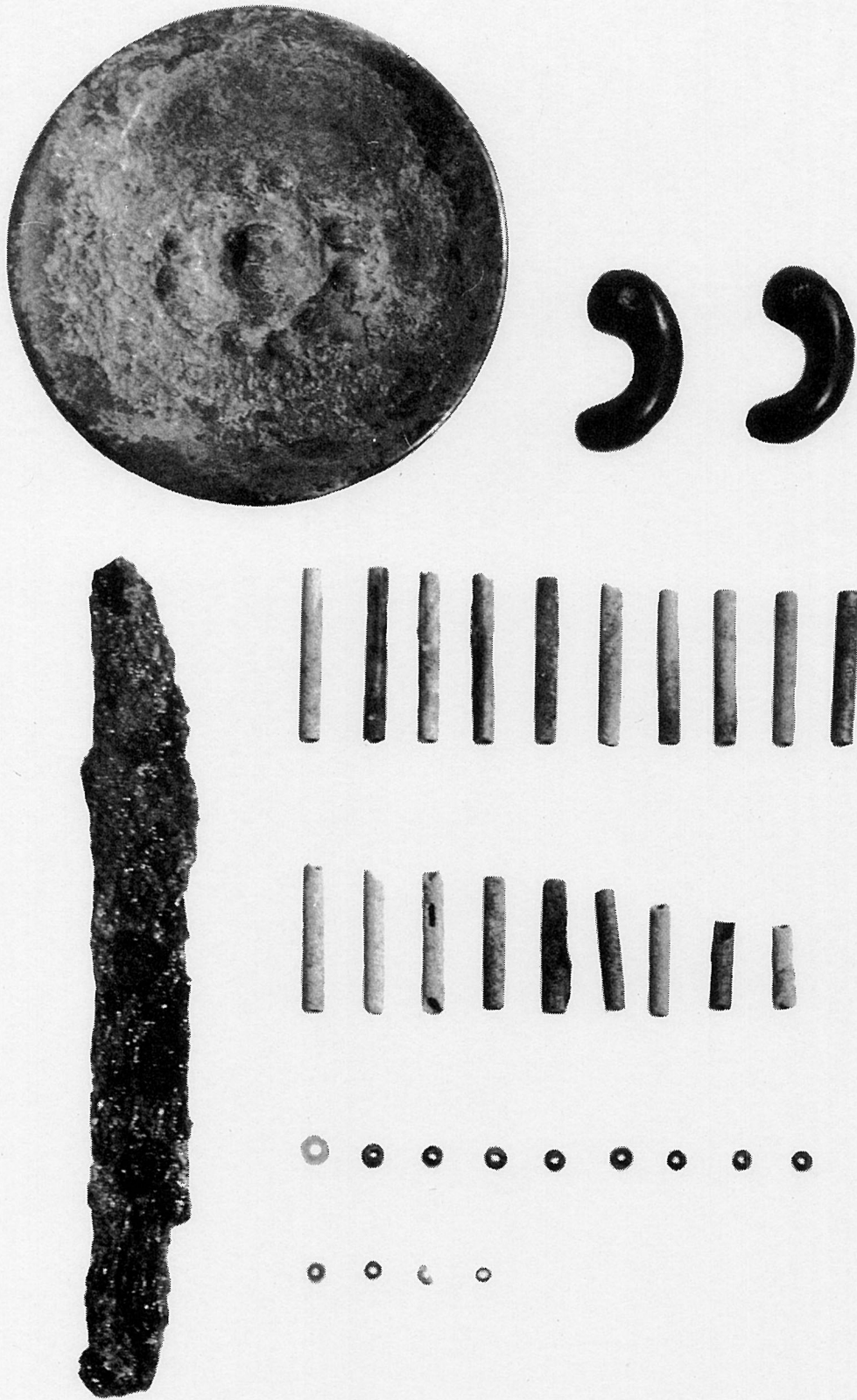
芳カ谷遺跡出土弥生土器(5)



芳カ谷遺跡出土弥生土器(6)



芳カ谷遺跡出土石製品及び鉄製品
(1~3砥石, 4不明, 5紡錘車状石製品, 6~7鉄器)



芳カ谷1号古墳出土遺物

広島市の文化財 第30集

広島市安佐南区祇園町所在

広島経済大学構内遺跡群発掘調査報告

1984年3月

編 集 行 広島市教育委員会
（社会教育部社会教育課）
広島市中区国泰寺町一丁目4番21号
TEL (082) 245-2111 (代)